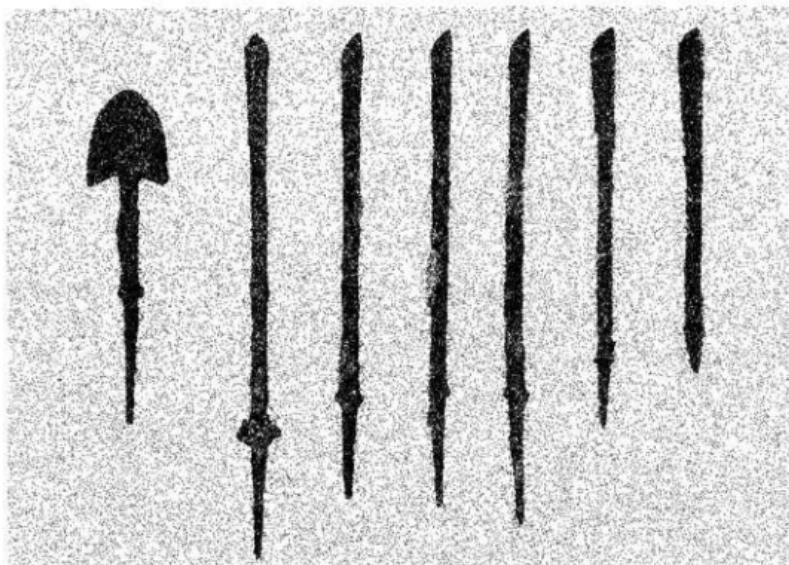


研究紀要

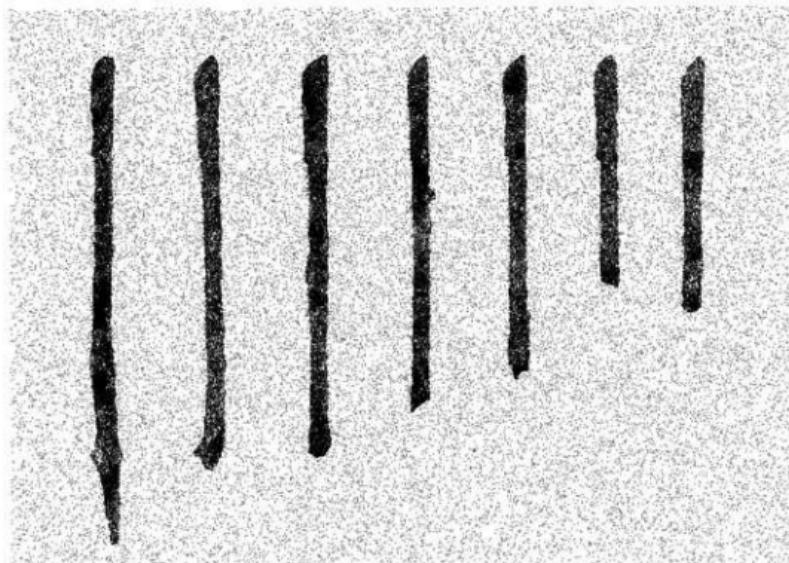
第 10 号

1993

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

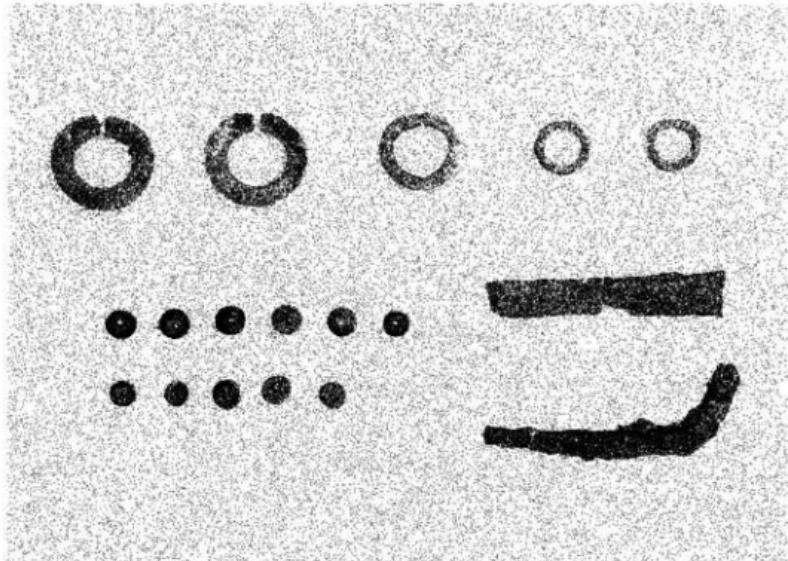


1 毛呂山町川角15号墳 鉄鏃 (1)

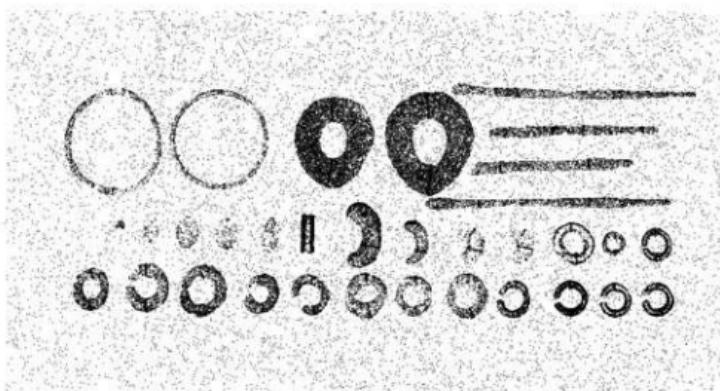


2 毛呂山町川角15号墳 鉄鏃 (2)

図版2



3 毛呂山町川角15号墳 装身具・鉄製品



4 毛呂山町大類古墳群出土遺物

目 次

序

〈論文〉

- 子母口式新段階「木の根A式」土器の再検討 金子 直行……(1)
—細隆起線文土器の出自と系譜を中心として—
- 羽状縄文系土器の紋様構成（点描） 2 黒坂 権二……(45)
- 遮光器系土偶についての考察 浜野美代子……(83)
- 方形周溝墓出土の木製品 野中 仁 福田 聖……(113)
- 吉ヶ谷式集落の展開 石坂 俊郎……(159)
- 埼玉県域の出現期古墳における土器祭式の様相 山本 靖……(181)
- 東国における終末期古墳の基礎的研究（2）
田中広明 大谷 徹……(203)
- 腰帶の一考察 田中広明……(245)
- 北武藏の古代通路について 井上尚明……(257)

東国における後・終末期古墳の基礎的研究(2)

田中広明・大谷 徹

要約 本稿は埼玉県内に所在する後・終末期古墳の中で、今までに資料化されていない古墳をとりあげ、資料化することを目的とした基礎的研究である。前回は墳丘測量及び横穴式石室の実測を中心におこなったが、今回は入間地域に所在する2基の既掘古墳を対象に出土遺物の再検討を実施した。

的場牛塚古墳は、6世紀後葉に築造された後期の前方後円墳である。出土した金銅製指輪から畿内政権による半島経営に関連した東国の中小首長として、その独自性が注目されている古墳である。

川角15号墳は越辺川流域に所在する群集墳の中で、発掘調査により実態の判明した数少ない古墳の一つである。出土した鉄鏃は、6世紀後葉から7世紀初頭の良好な一括資料として注目される。

こうした地道な作業の積み重ねこそが、東国の6～7世紀史の具体像を探っていく、着実な一步と信じ、これからも継続して調査を実施していきたいと思う。

はじめに

昭和62年度に埼玉県埋蔵文化財調査事業団の研究助成をうけた田中・大谷の両名は、資料化されていない県内の主要な後・終末期古墳の墳丘測量及び埋葬主体部の実測調査をおこない、その成果を『研究紀要』第5号に報告した。その後、平成元年度より古墳詳細分布調査が、埼玉県教育委員会によって進められ、県内に所在する古墳の実態が解明されつつある。

このような経緯を踏まえ田中・大谷は、再び平成3年度、前回と同一のテーマで当事業団から研究助成をうけ、先の研究を継続することとした。特に今回は、既掘古墳の副葬品及び供獻土器等の基礎資料化に主眼を置いて、入間地域に所在する川越市的場牛塚古墳、毛呂山町川角15号墳の2基の古墳について基礎調査を実施した。

その一つ川越市的場牛塚古墳は、昭和40・41年に川越市史編纂事業の一環として発掘調査された後期前方後円墳である。この時出土した遺物は、川越市教育委員会に保管され、現在川越市立博物館に展示されている。既に出土遺物は、『川越市史』に掲載されているが、調査から30年近くを経過し、遺物の見方にも変化が生じたため新たに実測図をおこし、気がついた点について若干の観察結果を補足することとした。なお、出土遺物は一括して平成元年5月12日付けで市指定文化財に指定されている。

入間郡毛呂山町に所在する川角15号墳は、昭和35年に発掘調査された小規模円墳で、調査当時は毛呂山町78号墳と呼ばれていた。既に調査担当者の田中一郎氏によって調査の概要が報告され、横穴式石室から良好な鉄鏃のセットが出土したことが知られている。出土遺物のうち代表的なものが紹介されているに過ぎなかつたため、今回新しく鉄製品と装身具を中心に実測調査をおこない、その成果を報告することとした。なお、遺物は現在毛呂山町歴史民俗資料館に展示されている。

本稿が、東国の後・終末期古墳研究の一助となれば幸いである。

I 川越市場牛塚古墳

1. 調査の目的

的場牛塚古墳は埼玉県の中央部のやや南、川越市の場に所在する全長47mの前方後円墳である。昭和40・41年に川越市史編纂事業の一環として発掘調査が実施され、河原石小口積の横穴式石室を埋葬主体部とすることが明らかにされている。盗掘に遭っていたが、石室の内部からは金銅製指輪、耳環、管玉、ガラス小玉、鉄鏃、直刀、銀装刀子、馬具等の豊富な副葬品が出土した。とりわけ全国でも類例の少ない金銅製の指輪を出土した古墳としてつとに著名である。

その全容については、既に調査を担当された甘粕 健・小泉 功尚氏によって昭和47年刊行の『川越市史』第1巻原始古代編に詳細に報告されている(甘粕・小泉1972)。その考察のなかで、本古墳の造営年代や埴丘の造営企画と尺度の復元、被葬者の性格など多岐にわたる問題について論究されている。このように本古墳は全貌の明らかにされた後期前方後円墳の稀有な調査例として、当該地域の後期古墳文化を考究するうえできわめて重要な位置を占めるものである。

小稿では、現在川越市立博物館に所蔵されている本古墳出土遺物の再調査を通して新たに判明した知見などを踏まえ、当該地域における後期古墳の基礎資料の一つとして再評価することを第一の目的とする。さらに、現在の遺物研究の水準に照らし合わせて、出土遺物に関する総合的な検討をおこない、本古墳出土遺物の内包する幾つかの問題点について考えてみたいと思う。特に指輪、馬具、須恵器等は本古墳の歴史的性格を考えるうえで興味ある問題を提起している。

2. 位置と周辺の遺跡

的場牛塚古墳は、入間川とその支流の小畔川に挟まれた入間台地の最南端、入間川中流域左岸に位置している。現存するのは牛塚古墳1基だけとなっているが、かつては古墳群を構成し、的場古墳群と呼ばれていた。古墳のすぐ北側をJR川越線が走り、その車窓より古墳の全容を眺望することができる。

周辺地域における古墳の分布をみると、対岸の入間川中流域右岸には上円下方墳として著名な山王塚古墳(小泉1984)をふくむ川越市南大塚古墳群が位置している(小泉・今泉1974)。そのうちの南大塚4号墳は、6世紀後葉に築造された横穴式石室を埋葬主体部とする全長約36mの帆立貝式前方後円墳で、円筒埴輪や人物・馬・大刀などの形象埴輪が多数出土している(小泉・田中1988)。築造時期も牛塚古墳に近く、両者の関連性が注目される。

入間川中流域の狭山市域には、右岸に直刀を出土した福荷山公園古墳群(小渕1984)、左岸に上広瀬古墳群(駒宮1970)、笹井古墳群(城近・三島1972)などの7世紀を中心に形成された小規模な古墳群が群在している。

小畔川流域では、下流域左岸にどうまん塚古墳、西原古墳、小堤山神古墳など累代的に築造された有力墳をふくむ川越市下小坂古墳群が所在しており、6~7世紀にかけて古墳群が形成されている(甘粕・小泉1972)。どうまん塚古墳は6世紀初頭に築造された直径24.5mの円墳で、木棺直葬の埋葬主体部をもち、擬銘文帶変形獸列鏡、白玉、大刀、鉄鏃、挂甲、斧頭、砥石、馬具等の多彩な



の壙古墳群（A）・南大塚古墳群（B）・下小坂古墳群（C）・天王山古墳群（D）・小仙波古墳群（E）・仙波古墳群（F）・岸町俄穴墓群（G）・牛堀古墳（1）・南火火4号墳（2）・山王塚古墳（3）・どうまん塚古墳（4）・西原古墳（5）・小堀山神古墳（6）・三室福壽神社古墳（7）・多宝塚古墳（8）・磐多宮古墳（9）・飛岡山古墳（10）・愛宕山古墳（11）

第1図 牛塚古墳周辺遺跡分布図(S=1:50,000)

遺物が出土している(小出1963)。また、その上流域には7世紀を中心に形成された鶴ヶ島市鶴ヶ丘古墳群がある(谷井・小久保1976)。鶴ヶ丘稲荷神社古墳は、切石積の横穴式石室を埋葬主体部とする方墳で、石室の樋方に堅固な版築が施されていた(岩瀬1985)。こうした版築技法は、古代寺院の基壇築造法に酷似しており、技術的関連性が指摘されている(松本1986)。

武藏野台地の北端部にあたる川越市街地の新河岸川流域には、仙波・小仙波古墳群が展開している(平岩1991)。仙波古墳群には、当該地域における最古の古墳のひとつである三変稲荷神社古墳が所在する(甘粕・小泉1972)。三変稲荷神社古墳は小規模な方墳で、かつて龜龍鏡1面と碧玉製石劍1個が出土したことが知られる。昭和60年には、県史編さん室によって発掘調査がおこなわれ周溝から多量の壺形土器が出土し、4世紀後半頃の築造と想定されている(増田他1986)。周辺には慈眼堂古墳、山王塚古墳などが所在する。また、小仙波古墳群には浅間山古墳(父塚)、愛宕山古墳(母塚)の2基の大型円墳が現存している。

3. 的場牛塚古墳をめぐる研究

的場古墳群は、現在では牛塚古墳を除いたほとんどの古墳が消滅しており、古墳群の形成時期や群構成などについて不明な部分が多い。しかしながら、文政年間に編纂された『新編武藏風土記稿』巻三百八十一高麗郡之六的場村条の記述に往時の様子を偲ぶことができる。それによれば三芳野塚、初雁塚、牛塚などの有力墳のほかに30基程の塚が台地上に所在していたことが知られる。さらに、三芳野塚、牛塚の付近の沖積地には初雁池と称する灌漑用池が存在していたようである。

その後も的場古墳群に対する考古学的な関心は高く、昭和6年には旧高萩村(現日高市)在住の郷土史家、清水嘉作氏によって牛塚古墳周辺の畠から出土した円筒埴輪や人物埴輪等が報告されている(清水1931)。また、昭和初期に東京帝室博物館の後藤守一氏が中心となって編纂した『埴輪集

圖 邊 塚 野 芳 三



第2図 (左)『新編武藏風土記稿』巻381、(右)牛塚古墳周辺出土円筒埴輪(清水 1931)

成図鑑』(第3回Na19)の中に柴田常恵氏所蔵の武藏国入間郡霞ヶ関村字的場発掘の女子半身像が紹介されている(東京帝室博物館1932~1936)。残念ながら、これらの埴輪を出土した古墳の所在地は明確ではないが、現在消滅してしまった古墳の中に埴輪を樹立する有力墳が存在していたことを示唆しており、その資料的価値は高い。

このように本古墳は的場古墳群の主墳として早くから周知され、その重要性が認識されていたことが、市史編纂事業の一環として学術調査が実施された大きな要因であったと考えられる。当時の古墳調査の水準は、埋葬主体部の検出に主眼が置かれ、墳丘や周溝については等閑視される場合が多かった。しかし、この調査では、墳丘及び埋葬主体部の総合的調査がおこなわれ、昭和40年代としては画期的な調査であったと評価されている。その概要については後述することにして、ここでは『川越市史』以後に発表された本古墳に関する年代的位置づけや歴史的評価についての諸見解を瞥見し、問題の所在を明らかにしたい。

まず、調査担当者の一人である小泉氏は、本古墳について「7世紀初頭に築造された入間川流域最大の前方後円墳であり、金銅製の指輪の検出は、高句麗系渡来人との関係において理解すべきである。おそらく彼等によって招来されたか、作られたものと考えられる。武藏国高麗郡の本拠地に接している事からもその意を重視することができ、その先駆的なものであろう」とその歴史的位置づけを明確にしている(小泉・田中1988 P1~2)。ここに示された年代観は『川越市史』で提示された年代観を踏襲したものであるが、金銅製指輪の出土から被葬者像を渡来系氏族との関わりで理解しようとする視点は、以後の研究に大きな影響を与えている。

金井塙良一氏は、入間地方の前方後円墳を検討するなかで本古墳の築造時期を須恵器、土師器などの出土遺物の検討から西暦600年前後に想定し、当該地域における最後の前方後円墳の候補の一つとして取り上げている(金井塙1980)。同じく、杉崎茂樹氏も入間地区では最も新しく築造された前方後円墳の一つとして位置づけ、築造年代を6世紀末葉頃に比定している。さらに、こうした中小の前方後円墳も大型前方後円墳の築造停止に遅れることなく7世紀初頭段階までは終末を迎えていることから、その背後に畿内政権による強力な政治的変革を想定している(杉崎1992)。

一方、若松良一氏は本古墳の場合、発掘調査で埴輪の検出に意が注がれたにもかかわらず、その個体数は細片少量という異常に少ないものであることから、墳丘を巡るような樹立方法ではなく、横穴式石室の前庭部を中心とするような限定的な配置が推定されるとして、北武藏における埴輪祭祀終焉期の様相を示す古墳として位置づけている(若松1985)。同じく、金井塙氏も本古墳を埴輪祭祀終焉期の一例として再確認し、西暦600年前後における前方後円墳の消滅と軌を一つにして埴輪祭祀がほぼ一齊に消滅したと想定している(金井塙1987)。

これまで見てきたように本古墳の築造年代に関して、各研究者によって若干の違いはあるものの『川越市史』で提示された6世紀末~7世紀初頭頃に比定することで基本的に一致している。これは墳丘から出土した提瓶、器台、甕などの須恵器の特徴が、田辺昭三氏の陶邑編年(田辺1981)のTK209型式に対比されることに依拠したもので、大方の研究者に受け入れられてきたと言えよう。しかし、酒井清治氏が指摘するように出土した須恵器の胎土には白色針状物質が含まれ、器形や調整技法の特徴から南北企業跡群産と推定されることから、陶邑編年との直接的な対比には大きな問

題を残している（酒井1989）。また、県内の古墳出土馬具を再検討した関・義則・宮代栄一氏の研究によれば、本古墳出土の馬具の特徴はTK43～TK209型式期の特徴を示しており、従来の年代観よりも若干遡る可能性も指摘されている（関・宮代1988）。このように従前の研究で示されてきた年代観は、必ずしも副葬品の総合的な研究を通して導かれたものとは言い難く、再度検討する余地が残されているものと思われる。

次に、年代観ともかかわる問題であるが、本古墳の歴史的評価をめぐり、人間地方における最後の前方後円墳、あるいは埴輪祭祀終焉期の古墳として位置づけ、その具体像を探るための重要な鍵を握る古墳と理解されてきている。さらに、金銅製指輪を巡って、その製作地や入手経路の問題、6世紀における半島経営とのかかわりなど被葬者の性格について各研究者によって種々論じられている。しかし、古墳出土指輪の新例は国内では5世紀後半の奈良県新沢126号墳（樋原考古学研究所編1977）など数例しか知られておらず、今後は中国や朝鮮半島から発見されている指輪との比較検討を通して彼我の交渉について論じることが基本的な観点となるであろう。そのためにも形態的特徴の比較だけでなく、製作技術などを踏まえた多面的な研究の方向性が要求されており、まず遺物の詳細な観察から論を進めることが有効な手段と思われる。

4. 既往の調査概要

牛塚古墳は、川越市大字の場字牛塚2473番地に所在している。現在は川越市指定史跡として史跡整備されているが、最近では古墳の周辺まで宅地化の波が押し寄せ、往時の面影を偲ぶことはできない。前述したように発掘調査の成果については、既に『川越市史』に詳報されており、重複する内容も多いとは思うが、本古墳の性格・特質を理解するために必要最小限の事柄について先の発掘調査の概要を簡単に紹介しておきたい。

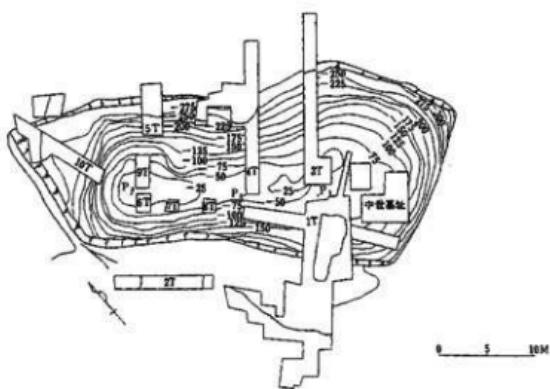
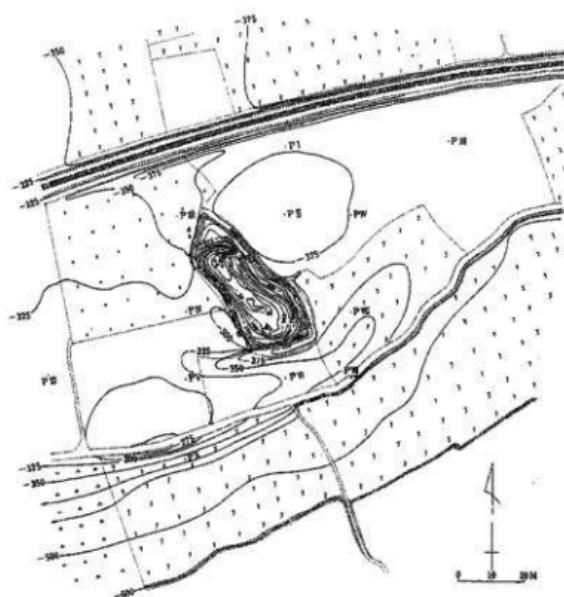
(1) 墳丘

発掘調査に先駆けておこなわれた墳丘剖面調査によって、全長42m、後円部径20m、前方部長20m、前方部幅17.5mを測る前方部を北西に向けた前方後円墳であることが明らかにされた。主軸をN-45°Wに採り、現況での墳丘の高さは前方部が3.75m、後円部が3.25mを測り、前方部が後円部に比べ発達した後期古墳通有の特徴を示している。さらに、墳丘に設定されたトレンチ調査の結果、築造当初の墳丘規模は全長47m、後円部径27m、前方部幅27mを測り、3段築成の墳丘を有する前方後円墳で、盾形の周溝を巡らしていたと復元されている。

(2) 墓葬主体部

埋葬主体部は、後円部に構築された河原石小口積の両袖型横穴式石室で、玄室には当初埋葬に伴う棺床面（第1次埋葬主体部）と、追葬に伴う棺床面（第2次埋葬主体部）が確認されている。また、玄室の側壁もそれに対応するように2次的な改修がおこなわれており、追葬に伴う埋葬施設の改修行為を示す事例として注目される（註1）。

玄室は奥壁に大型の石材を置いているほかは、河原石を小口積にして壁面を構築していた。一方、羨道は石材をまったく用いず、表面に粘土を張った土壁によって構築されていた。玄室の平面プランは、側壁がわずかに崩る隅丸長方形を呈し、長さ3.8m、幅2.4mを測る。羨道は長さ3.8mを



第3図 牛塚古墳 墳丘測量図(甘粕・小泉 1972)

測り、羨道部分で幅を狭めている。

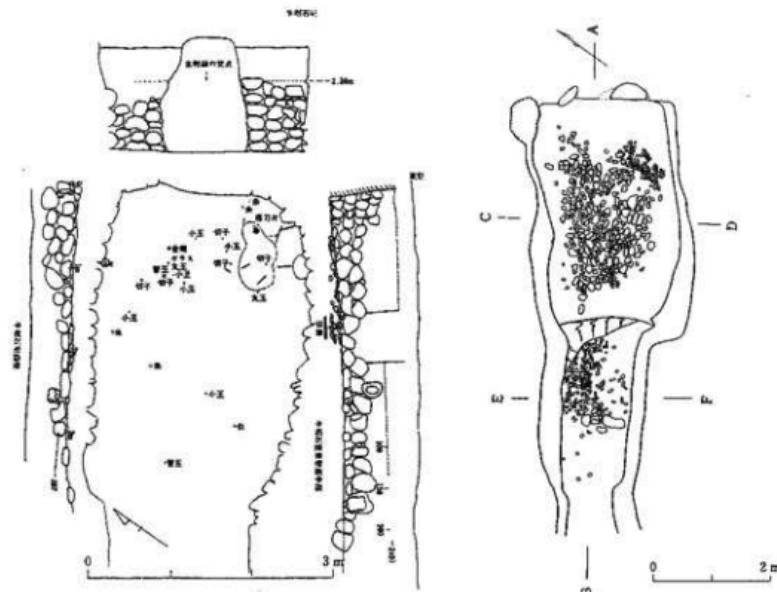
第2次埋葬主体部の玄室プランは第1次埋葬主体部とは異なり、片袖型の長方形を呈する。壁体の構築は、第1次の石室の石組が崩落したものの土壁を利用して、ロームあるいは粘土混じりのロームを張り付けて修復していた。玄室の規模は長さ約4m、幅約2.4mを測る。羨道は第1次のそれを共有しており、改修はほとんどおこなわれていなかった。

(3) 遺 物

石室は盜掘を受けていたため遺物の残りが全体に良好ではなく、副葬状態の原位置を示すような遺物はほとんどなかった。

第1次棺床面から出土した遺物は、石室の崩壊や追葬に伴う「片付け」によって原位置を示すものはみられなかった。しかし、奥壁部分に遺物が集中していたことから当初埋葬に伴う遺物の配置状況についての復元が試みられている。それによれば「遺物の分布状況から玄室の奥壁寄りの部分では、西側に金環・切子玉・管玉・小玉をつけた1体と東側に切子玉・小玉をつけた1体の少なくとも2体の遺骸が頭を奥壁に向けて並列して埋葬され、その東側には剣に納めた鉄鏃と直刀などの武器が、西側には馬具がそれぞれ添えられていた」と想定されている(甘粕・小泉1972P389)。

同様に第2次棺床面も盜掘による攪乱が徹底的におこなわれていたが、幸運にも金銅製指輪や金銅装馬具などの貴重な遺物が棺床面に残されていた。



第4図 牛塚古墳(左)第1次埋葬主体部、(右)第2次埋葬主体部(甘粕・小泉 1972)

また墳丘からは、北側くびれ部に近い第4トレンチ及びその拡張区の墳丘2段目テラス面から葬送儀礼に使用されたと推定される須恵器小型壺1・提瓶1・脚台部1がまとめて出土しており注目される。他には後円部南側の石室開口部前面にあたる第1トレンチの周溝内から耳環1・土師器比企型壺3が出土している。

さて、各々の遺物の出土状況の詳細については先の報告に譲ることとし、発掘調査によって得られた遺物の出土位置・種類・数量をまとめてみると以下の通りである。

第1次埋葬主体部

装身具……耳環2・管玉2・切子玉5・漆塗玉2・ガラス小玉6

武 器……鉄鎌10・直刀片1

馬 具……雲珠1

第2次埋葬主体部

装身具……指輪2・耳環3・ガラス小玉35

武 器……鉄鎌18・刀子3・銀装刀子1・直刀片1・鎧1・鞘尻金具1

馬 具……銕板1・辻金具1

墳 丘

須恵器……小型壺1・提瓶1・脚付壺(脚台部)1

周 溝

装身具……耳環1

土師器……比企型壺3

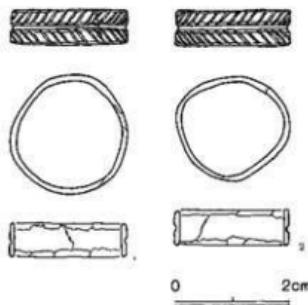
5. 遺 物 各 説

(1) 装 身 具

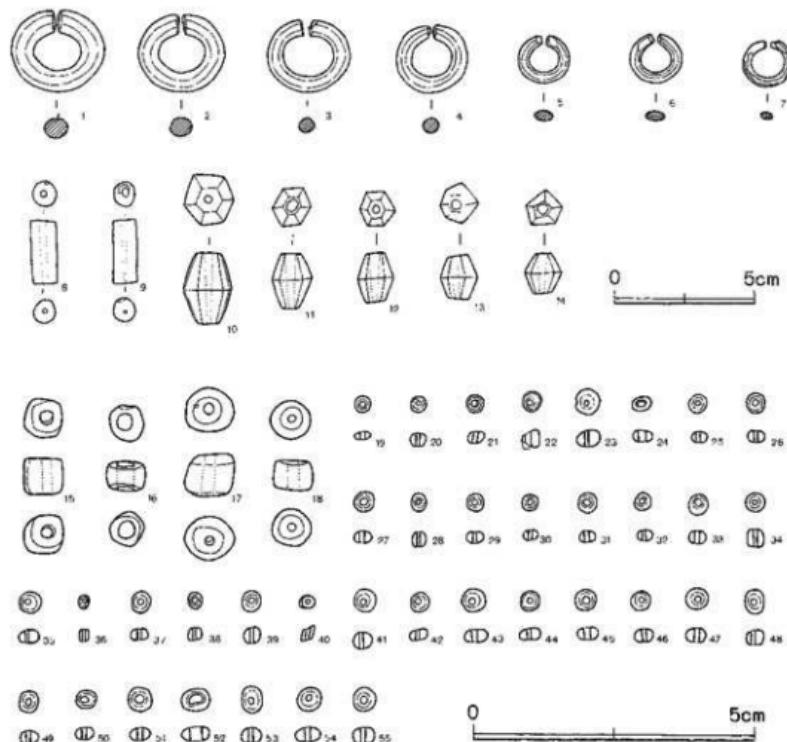
指 輪 (第5図1・2)

金銅製指輪は第2次埋葬主体部から2点出土しているが、攪乱のため原位置はとどめていなかった。製作技法は幅6mm、厚さ1mmほどの銅板を環状に曲げて螺付けし、外表面を金の薄板で覆い、その両端を内側に折り込んだものである。外表面には、中央に凹線を巡らした綾杉文が陰刻されている。

1は径2.1cm、高さ0.6cmを測り、ほぼ円形を呈する。外表面には金の薄板の合わせ目がみられる。また、内面には銅板の合わせ目が観察できる。綾杉文の描出方法については、銅板の表面に塑彫りによって刻んだ文様を繊細に打ち出したものと推定される。2は土圧のためか大きくなっている。大きさは径2.0×1.9cm、高さ0.6cmを測り、製作技法及び文様は1と同じである。



第5図 金銅製指輪



第6図 装身具(耳環・管玉・切子玉・丸玉・小玉)

国内における類例は、奈良県新沢126号墳（金製5・銀製3）をはじめとして、福岡県沖ノ島7号遺跡（金製1）、同中津宮付近（銀製1・銅製1）、同八女郡広川町水原所在古墳（金銅製2）などが知られているに過ぎない（原田1958）。このうち新沢126号墳・沖ノ島7号遺跡から出土した前面に装飾をつけた金製指輪に類似するものが、慶州皇南大塚南墳から出土しており、新羅系の遺物と考えられている。また、新沢126号墳の外周に刻みのある金製指輪のように、金線を4ないし5条巻きつけている例が、百濟の武寧王陵で刻み目のないものが出土している（千賀1992）。

耳 環 (第6図1~7)

報告によれば耳環の出土位置の明らかなものは6点であるが、現存しているのは7点を数え、異同が認められる。個々の出土位置については2・4が第1次埋葬主体部、3が第1トレンチ周溝部分、5~7が第2次埋葬主体部出土品にそれぞれ対応するものと思われる。ただし、1に関しては出土位置が不明であるため、未報告分であるのか、他の古墳からの混入品であるのかは現状では判断できず注意が必要である。なお、5・6は出土位置や法量・形状の特徴などからみて対をなすも

のと考えられる。

1は中実の銅地銀張である。径 3.3×2.9 cmの大きさで、断面は 8×7 mmのやや太身の円形を呈する。装着部の隙間は1mmほどである。全体に緑青に覆われ、部分的に銀箔を残す。2は中実の銅地金張である。径 3.1×2.8 cmの大きさで、断面は 7.5×6.5 mmの略円形を呈する。装着部の隙間は1.5mmほどである。全体に緑青に覆われ、内側を中心に金箔を残す。3は中実の銅地銀張のやや細身の環である。径 2.9×2.5 cmの大きさで、断面は径5.5mmの略円形を呈する。装着部は2mmほど開き、端面には緑青がみられる。残りは良好で、乳白色を呈する銀箔が認められる。4は中実の銅地金張である。径 2.5×2.4 cmの大きさで、断面は径5.5mmの略円形を呈する。装着部は緑青が著しく、その隙間は1mmほどである。全体に残りが良く、黄褐色の金箔が斑に残る。5は中実の銅地金張の小型環である。径 1.8×1.65 cmの大きさで、断面は径 6×4 mmの梢円形を呈する。法量・形状などからみて6と対をなすものと考えられる。装着部の一部を欠損し、その隙間は2mmを測る。表面には金箔を一部残す。6は5と対をなすもので、中実の銅地金張である。径 1.8×1.7 cmの大きさで、断面は 6.5×4 mmの梢円形を呈する。装着部の一部を欠損し、金箔を遡に残す。7は中実の銅地金張の小型環である。大きさは径 1.8×1.65 cmを測る略円形を呈し、断面は 4.5×3 mmの細身の梢円形である。装着部の一部を欠損し、地金が露出している。全体に金箔が良く残る。

管玉（第6図8・9）

管玉は第1次埋葬主体部から2点出土している。いずれも碧玉製のもので濃緑色を呈し、表面は良く研磨され光沢がある。穿孔方法は片面穿孔。8は長さ23mm、径9mm、孔径1.5~2.5mmを測り、表面に整形時の剝離痕をわずかに残す。9は8よりもやや太身のもので、長さ22.5mm、径14mm、孔径1~2.5mmを測り、穿孔面側の孔の周りに穿孔時の剝離痕がみられる。

切子玉（第6図10~14）

切子玉は第1次埋葬主体部から5点出土している。いずれも水晶製のもので、色調は乳白色を呈する。穿孔は、すべて片側からおこなわれている。

10は最も大きく長さ25mm、径17mmを測り、断面六角形を呈する。穿孔は片面穿孔で、孔径は1.5~3mmを測る。11は長さ19.5mm、径14mmを測り、一部欠損する。断面六角形を呈し、各辺の長さがほぼ等しく均整がとれている。穿孔は片面穿孔で、孔径1.5~4mmを測る。12は長さ17.5mm、径13mmを測り、断面六角形を呈する。各面とも均等に仕上げられ、端部に丸みをもつ。穿孔は片面穿孔で、孔径1.5~4mmを測る。13は長さ16mm、径13mmを測り、断面六角形を呈する。各辺の長さにばらつきがあり、やや不整形に仕上げられている。穿孔は片面穿孔で、孔径1.5~3mmを測る。14は最小のもので長さ14mm、径13mmを測る。断面形は他と異なり五角形を呈し、やや不整形に仕上げられている。穿孔は片面穿孔で、孔径1.5~4mmを測る。色調は他に比べると風化が少なく、透明度が高い。

丸玉（第6図15~18）

ガラス製丸玉は計4点出土している。いずれも第1次埋葬主体部からの出土で、大きさはやや不揃いである。法量は、15が径7mm、厚さ6mm、孔径2mm、16が径7mm、厚さ5.5mm、孔径3mm、17が径9mm、厚さ7.5mm、孔径1.5mm、18が径7mm、厚さ5.5mm、孔径1.5mmをそれぞれ測る。形状はほとんどが偏平な円形を呈し、内部に成形時に生じた縱方向の気泡がみられるものがある。色調は紺色

を基調としているが、15・16は濃紺に近いのに対して、17・18はやや薄く若干の色調の違いがみられる。

小 玉（第6図19～55）

ガラス製小玉は合計37点を数える。出土位置の内訳は、第1次埋葬主体部から黄色のものが2点出土しているほかは、すべて第2次埋葬主体部からの出土である。ここでは個々の出土位置を特定できないため一括して説明する。

大きさはやや不揃いで、最大のもので径5mm、厚さ2.5mm、最小のもので径2mm、厚さ2mmを測る。平均的なものでは、径3～4mm、厚さ2～3mm、孔径0.5～1mm前後である。色調はコバルトブルー7点（19～25）、黄色15点（26～40）、紺2点（41・42）、黄緑13点（43～55）と多彩であり、多種類の発色剤を使用した製作が窺われる。コバルトブルーのものは風化のためやや色調にばらつきがあり、内部に成形時に生じた縦方向の気泡が観察される。黄色のものは大きさがやや不揃いである。黄緑のものは大きさが比較的均一に揃えられている。

（2）武 器

鉄 鐮（第7図1～8）

鉄鎌は報告によれば、第1次埋葬主体部から長頸棘籠被片丸造柳葉式を中心に約10本が出土し、第2次埋葬主体部から鑿箭式・片刃箭式・脇抉三角形式などの長頸鎌が約10本出土している。しかし、現存するのは図示した8点だけであり、必ずしも十分な検討をおこなうことはできない。ここでは、現存する資料について鎌身部の形態的特徴を中心に分類をおこなうこととする（註2）。

I類 長頸棘籠被片丸造柳葉式（1～3）

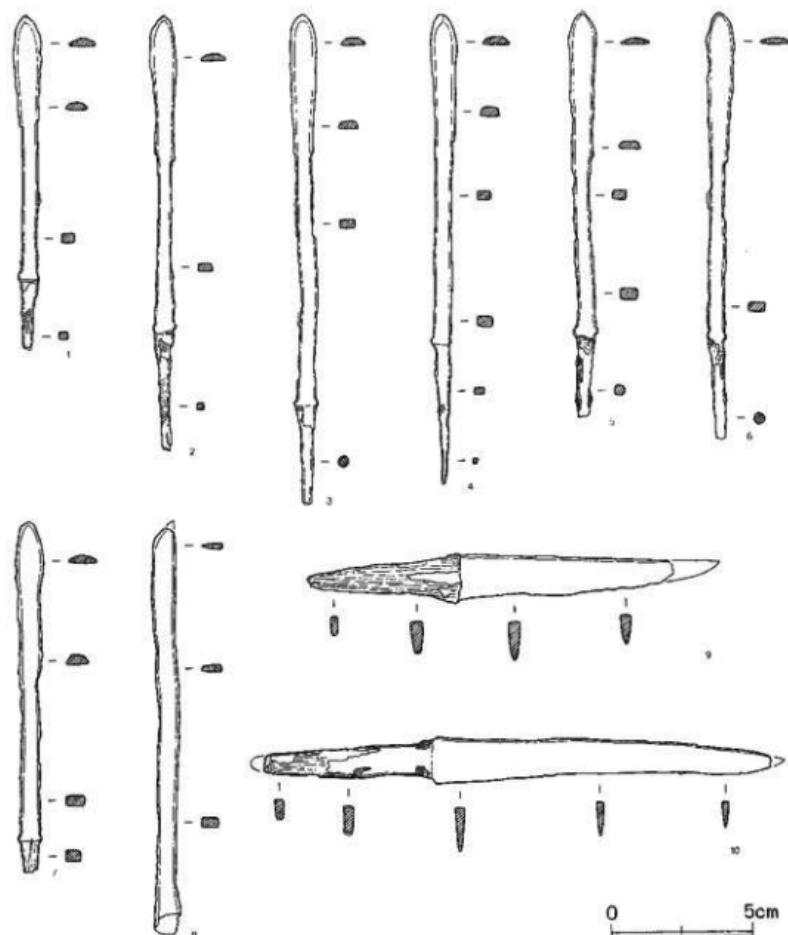
I類は、鎌身長及び頸部長の長短によってIa類・Ib類に細分することが可能である。

Ia類は、鎌身長及び頸部長が比較的短いものである（1）。鎌身は長さ4cm、幅1cmを測り、先端部にふくらをもち、直角闊を有する。頸部は長さ5.5cmを測り、断面矩形を呈する。棘状突起はやや短い。茎は端部を失し、断面矩形を呈する。木質及び樹皮様の口巻を遺存する。

Ib類はIa類に比べて鎌身及び頸部が長いものを一括した（2・3）。2は鎌身長5.3cm、幅1cmと長く、片丸造で直角闊もしっかりしている。頸部は長さ6cmを測り、断面形は偏平な矩形を呈する。茎は端部に向かって細くなり、断面矩形を呈する。木質及び樹皮様の口巻を遺存する。3は鎌身の形や大きさは2とほぼ同じであるが、頸部は3cmほど長い。鎌身長5cm、幅0.9cmを測り、先端部にふくらをもち、直角闊を有する。頸部は長さ9cmを測り、断面偏平な矩形を呈する。棘状突起は小さいが、しっかりした造りである。茎は端部に向かって細くなり、断面円形を呈し、棘状突起に接して樹皮様の口巻が残る。

II類 長頸棘籠被片丸造片闘箭式（4～6）

II類はX線透視による検討をおこなっていないため確実ではないが、肉眼観察によれば片闘箭式とでも称する特異な形態である。鎌身部の闘（逆刺）を片側にだけもち、鎌身形態はIa類とIII類との中間的な形態を示す。鎌身長は4.5～5.4cmと長く、刃部と片逆刺が連結したような形態である。頸部は長さ6.3～7.3cmと幅があり、断面矩形を呈する。棘状突起は両側に1mmほど突出する。茎は先端に向かって細く尖り、断面は概ね矩形を呈する。4はほぼ完存し、全長16.8cmを測る。



第7図 鉄鐵・刀子

このような形態の鉄鐵は、後藤守一氏の分類の「片小爪鑿箭式」や「互小爪鑿箭式」に類似しているものの、関の形状や断面形など細部で異なっている(後藤1939)。強いて類例を求めるべば、行田市埼玉將軍山古墳出土鉄鐵の中に類似する例が認められる(田中1988)。

III類 長頸鍊莖被片丸造鑿箭式(7)

1点のみの確認であるが、報告によれば第2次埋葬主体部から他に数点出土している。鐵身に間のない鑿箭式で、長さ2.7cm、幅1cmを測る。断面は片丸造である。頸部は長さ8.8cmを測り、断面

矩形を呈し、全体的に厚身で重厚な感じのものである。棱状突起は両側に1mmほど突出する。

IV類 長頸鍔範被闇無端刃片刀箭式（8）

1点だけが現存しているが、報告によれば第2次埋葬主体部から他に3点ほど出土している。鍔身の先端にのみ刃部のある端刃で、鍔身闇は不明瞭である。頸部は断面矩形を呈する。現存長14.6cmを測り下半部を欠損しているが、前報告によれば鍔範被であることが知られる。

刀子（第7図9・10）

刀子は報告によれば第2次埋葬主体部から3点出土したようであるが、現存するのは2点だけである。

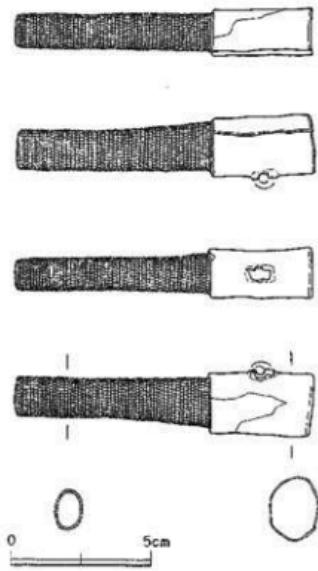
9は、切先を欠損するほかは全体に残りが良好である。現存長13.2cmを測り、本来は15cm前後の総長と考えられる。刀身は平棟平造で、断面二等辺三角形を呈し、棟の厚さは0.45cmを測る。闇の形状は木質が残存しているため肉眼では観察できない。茎は茎尻に向かって幅を狭め、茎尻を丸くおさめる。茎長5.5cm、厚さ4mm前後を測り、断面は刃側が狭い逆台形を呈する。10は、茎尻及び切先の一部を欠損しているほかはほぼ完存する。現存長18.2cmを測り、本来は総長19cm前後のものと推定される。刀身は切先に向かって幅を狭め、刃は研ぎ減りのため若干内反りしている。刀身は長さ12.1cm、断面二等辺三角形を呈し、棟厚3mm前後を測る。闇は両闇で2mmほどの段差をつくる。茎は木質をわずかに残し、茎尻に向かって幅を緩やかに狭める。茎の長さ6.1cm、断面矩形を呈し、厚さ4mm前後を測る。

銀装刀子（第8図）

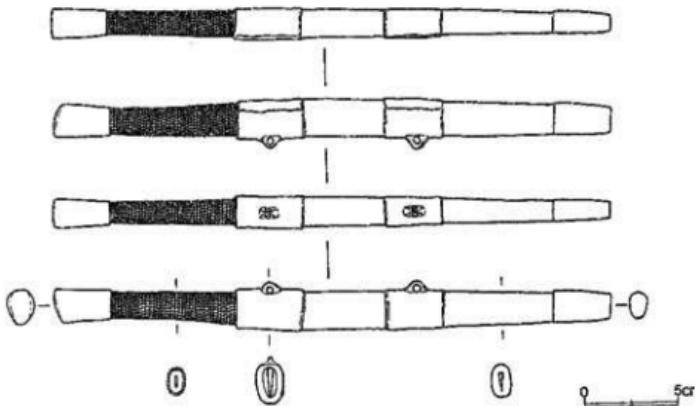
銀線を巻いた柄と銀製鞘口金具のみを残す。柄間には、全面に亘って銀線が巻かれている。長さ約6.9cm、断面楕円形を呈し、茎を柄木に落とし込んでいる。銀線は幅約1.5mmの断面薄鉢形を呈し、細かい刻目を施す。いわゆる呑口形式の鞘で、銀製の鞘口金具を用いている。長さ3.7cm、長径2.3cm、短径1.8cmの断面楕円形を呈する筒金具で、佩裏側には銀板の合せ目がみられる。背面に懸垂用の半円環を設ける。第2次埋葬主体部出土。

この銀装刀子について岡田賢治氏は、第9図のよう群馬県高崎市八幡觀音塚古墳出土銀装刀子との類似性から主頭柄頭に復元している（岡田1990）。こうした金翼装刀子は、関東地方では栃木県横塚古墳、群馬県綿貫觀音山古墳、同八幡觀音塚古墳、埼玉県小見真観寺古墳、千葉県丸塚古墳、同藤木5号墳などの6世紀後半に築造された大型前方後円墳から多く出土している（註3）。

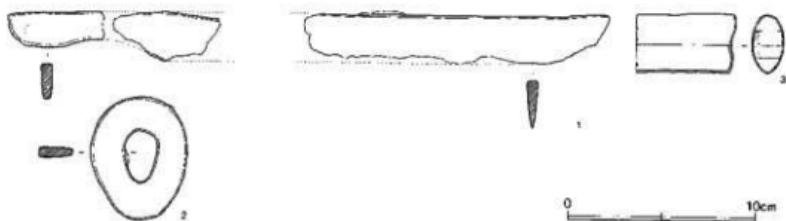
これらは装飾付大刀と同様に、一定の身分秩序を表示するために、あるいは支配者としての地位を視覚的



第8図 銀装刀子(岡田賢治氏 原図)



第9図 銀装刀子復元図(岡田 1990)



第10図 直刀・刀装具

に誇示するために、畿内政権から有力首長墓に葬られるような限定された階層に賜与された威信財の一つと考えられる。

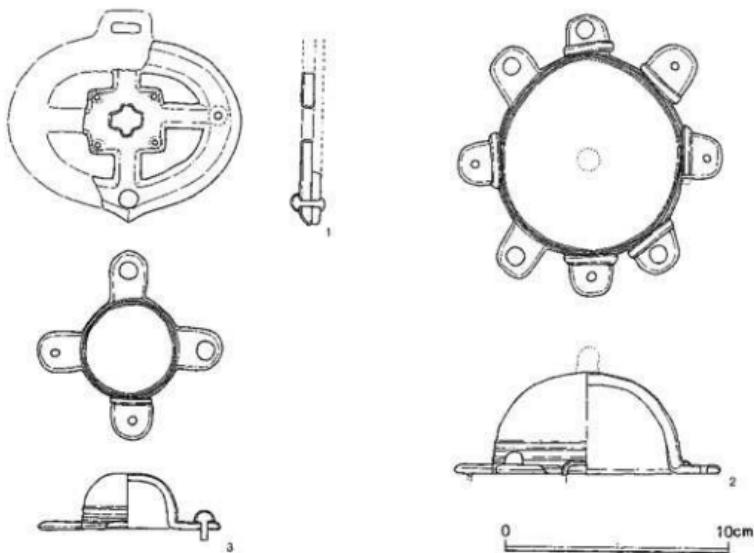
直刀(第10図1~3)

直刀は、第1次埋葬主体部から鉄錆と共に直刀断片が発見されているほかに、第2次埋葬主体部の玄室南東袖部から出土している。図示したものは、第2次埋葬主体部から出土したもので鉄製無窓鐔と鉄製鞘尻金具が伴う。

1の直刀は遺存状態が悪く、刀身の切先付近と茎の一部を残すのみである。刀身は平棟平造で現存長16.4cm、幅2.5cm、棟厚5.5mmを測る。関は銹化のため不明であるが、片關と推定される。茎は復元長8.5cmを測り、刃側に弧状を呈する割り込みをもつ。断面矩形を呈し、茎尻には径6mmほどの目釘が打ち込まれている。

2は鉄製無窓鐔である。長径6.6cm、短径5.2cmを測る倒卵形を呈する。孔は同じく倒卵形を呈し、長径2.7cm、短径1.7cmを測る。断面形は長台形を呈し、厚さ3~5.5mmを測る。

3は鉄製鞘尻金具である。厚さ1mmほどの鉄板を左回りに佩裏側で重ね合わせて筒部を造り、中



第11図 馬具(関・宮代 1988)

央部が浅く凹む底板を螺付した鋳造品である。長さ5.3cm、幅3.2cmを測り、断面は $3.2 \times 1.7\text{cm}$ の倒卵形を呈する。

(3) 馬 具

馬具は第1次埋葬主体部から雲珠1、第2次埋葬主体部から心葉形十字透文鏡板1と辻金具1がそれぞれ出土している。

鏡 板(第11図1)

鉄地金張の心葉形十字透文鏡板付書の鏡板1点のみを出土しており、銜や引手は現存していない。鏡板は立闇を欠失しており詳細は不明であるが、透十字文の文様をもつ心葉形で鉄台板、鉄地金張緣板よりなるものと思われる。

鏡板の外形は優美なハート形を呈する。台板及び緣板は、本来4箇所で笠紙を用いて留められていたようであるが、現状では笠紙1個を残すのみである。笠紙は紙頭を金張したもので、紙端を叩いてかしめる。中央の銜受座は $3.3 \times 2.8\text{cm}$ の矩形を呈し、本来は四隅を笠紙で留めた半球形の覆蓋を有するものと考えられる。その中央には銜を通すための十字形の孔があけられている。その横方向の孔に銜先環を差し込み、縱方向の孔には鏡板と銜とが分離しないように長方形状ないし棒状の金具をはめ込んで、それを台板に留めて銜先環を連結したものと推定される。鏡板の大きさは復元で最大幅10.4cm、高さは立闇を含めて9.4cmを測る。

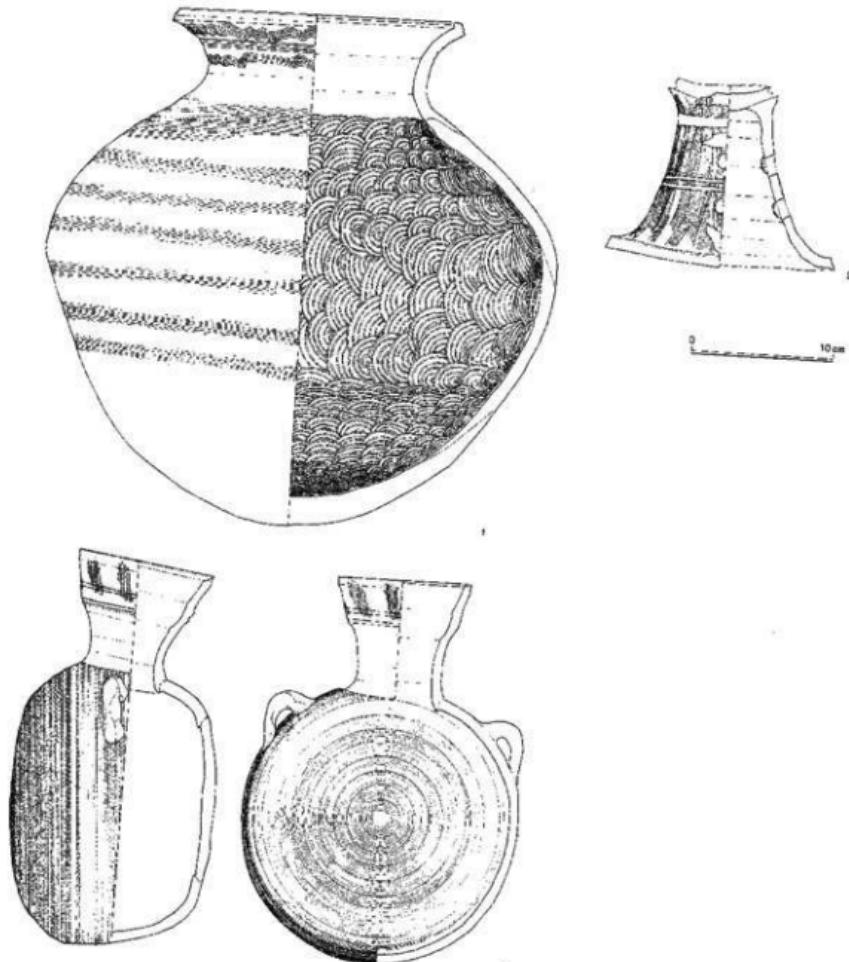
雲 珠(第11図2)

雲珠は鉄地金張で8個の半円形脚を有し、半球状の側面形を呈する。頂部には紙状の宝珠飾を

有しているが、銹化が著しく材質・形状とも不明である。伏鉢腹部には3本の凸線を巡らす。脚は8脚を等間隔に配置し、これに径8mm、高さ5mmの大型の鉄地金銅張の鉢を1個ずつ打ち込み、基部に鉄地金銅張の無文の資金貝1本を巻きつける。雲珠の径11.9~12.5cm、伏鉢径8.6~8.9cm、高さ5.7cmをそれぞれ測る。

辻金具（第11図3）

辻金具は1点のみ出土している。蓋珠とほぼ同工であり、セットをなすものと思われる。鉄地金



第12図 須恵器

銅張で半球状の側面形を呈し、腹部に2本の凸線を巡らす。脚は半円形を呈し、十字に配される。脚の中央には径9mmの大型の鉄地金銅張の紙が打ち込まれ、その基部には鉄地金銅張の無文の資金具が1本巻かれている。辻金具の径8.3cm、伏鉢径約4.1cm、高さ2.4cmをそれぞれ測る。

(4) 須 惠 器

須恵器は、小型壺・脚付壺・錐瓶があり、他に破片として壺の破片が2片ある。墳丘の北側くびれ部に近い第4トレンチ及びその拡張区の墳丘2段目テラス面からまとめて出土した。

小型壺（第12図1）

完形。胴部最大径は、胴部中央やや上位に存在し、胴部下位は若干突き出す。口縁部は大きく開き、口唇部で一旦内側に折り返し沈線状となる。全体の成形は、まず胴部の下から3分の1を半球形に外側を平行線状の叩き板、内側を同心円文の当て板で叩いて成形し、これに胴部上位の部分を粘土紐を当てながら、叩き板と当て板で成形して作っている。その後ロクロ調整で作られた口縁部を接合して成形が完了する。

調整としては、胴部中位以上を横方向のカキ目を一本置きに施し、口縁部は沈線で上下に区画した後、上下に波状文を施している。波状文は緩やかで、器壁への食い込みも少ない。内面に文様は施されていない。胎土に白色針状物質を含んでいる。口径19.6cm、胴部最大径36.8cm、器高36.4cmを測る。淡黄橙色で焼成は悪く、破片で採集されたら土師器と間違う可能性もある。

脚付壺（第12図2）

長頸か短頸か不明だが、壺形土器と結合した長脚付の壺である。壺底部と脚部は、おそらく三角形状の補強帯によって結合されていたことが、脚上端部の横ナデより上部の色調の違いによって理解できる。補強帯の貼付部分は淡い褐色で、脚全体は暗黄灰色である。なお内面は暗赤紫色である。

脚部の調整は、ロクロによる成形後、上から下へカキ目を施す。カキ目の後、指で触れたらしく所々に指痕痕が残る。脚中央付近に棒状工具による2本の沈線がみられ、断面は丸い。内面は、ロクロ痕跡が明瞭にみられ、壺部の底部内面に青海波文を施す。円形の透孔は上下2段3方向に穿たれている。焼成はあまり良好でなく、胎土に赤色粒子や白色針状物質を含む。

錐 瓶（第12図3）

胴部の3分の1、口縁部の4分の1が欠損している。また把手も一方を欠損している。全体の成形は、まず胴部を橢円形にロクロ成形し、径10cmの開口部を若干大きめの円盤で塞ぎ、胴部を作っている。口縁部をのせる以前に、胴部全体を縦方向のカキ目で調整する。胴部最大径の部分を中心に口縁部のつく位置に円形に穴を穿ち、別途作られた口縁部をついている。口縁部は、二つの沈線で、頸部と口縁部を分割している。口縁部には、沈線施工後、縦方向のカキ目がみられる。白色針状物質を含み、小石も含む。色調は暗灰色である。

6. 出土遺物の検討一まとめにかえて一

牛塚古墳出土遺物の再検討により、本古墳が畿内における前方後円墳の編年基準の10期にほぼ併行する時期の古墳であることが、その多彩な副葬品の内容から判明した（広瀬1991）。しかし、ここに提示した内容は、必ずしも甘粕・小泉両氏の研究成果を越えるものではなく、屋上屋を架す説は

免れないものである。今さらながら、両氏の業績の偉大さには敬服させられてしまう。

これまでに述べてきたように牛塚古墳の提起する問題は多岐に亘っており、その歴史的意義について論及するには力量不足であるため、ここでは馬具と須恵器を中心に考察をおこない、まとめにかえることを御寛容願いたい。

(1) 馬 具

牛塚古墳からは、第1次埋葬主体部から半球形の大型雲珠1点、第2次埋葬主体部から心葉形十字透文鏡板1点、半球形辻金具1点がそれぞれ出土している。これ以外に副葬品の中には、鞍・鑓・杏葉等の他の馬具は発見されておらず、全体の馬装は不明である。

県内の馬具出土古墳を検討した関 義則・宮代栄一の両氏は、牛塚古墳出土馬具の年代について類例との比較から、TK43～TK209型式期に位置づけている（関・宮代1988）。さらに、埋葬主体部を異にして出土した雲珠と辻金具を詳細に観察した結果、造りが酷似していることから、セットとして用いられたものであると指摘している。そこで再度、両者を比較したところ、金銅張技法や伏鉢・脚部の形態などの類似性から両者は同工品とみなして良いものと判断された。おそらく、これらは一具の馬具として、当初埋葬に伴い副葬されたものが、追葬時の片付けや盗掘などによって2次的に移動したものと考えられる。

さて、馬具の年代的な位置づけについて、類例との比較から製作技法や構造などを中心に検討してみることにする。

最初に心葉形十字透文鏡板付書は、西尾良一氏の集成によれば全国で10例ほどの出土例が知られている（西尾1987）。出土した古墳の多くは、6世紀後半～末葉に築造されたもので、前方後円墳からの出土例が目につく。類例は、栃木県新田大塚古墳（後藤1937）、千葉県法皇塚古墳（小林・熊野1976）、同西原古墳（柴田1928）、奈良県三里古墳（河上1977）、島根県上塩冶築山古墳（山本1951）、同岡田山1号墳（西尾1987）等から出土している。西尾氏によれば、類例の多くは銜が二連で、引手はすべて引手盃を別造しないタイプのもので、これ以外のものを連結している例はみられないと言ふ。

また、心葉形鏡板全体の変遷を検討した岡安光彦氏によれば、本古墳例にみられる縁板の要所に大型の飾鉢を配し、台板と紋様板とを別造りにする紋様透技法や、鏡板と引手の連結部を半球状金具で覆うなどの特徴は、同氏の心葉形鏡板・杏葉の編年（VI期前半に相当し、TK43型式後半に併行する6世紀後葉（570～580年代）に位置づけられている（岡安1988）。

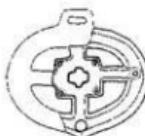
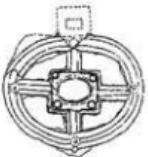
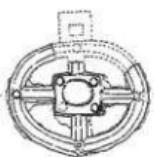
次に、鏡板と銜の連結方法の分析から、その特徴について検討したい。鏡板中心部の銜受座にあけられた十字形孔は、横方向の孔に銜先環を差し込み、縦方向の孔に鏡板と銜が分離しないように長方形状ないし棒状の金具をはめ込んで、それを台板に留め、銜先環を連結したものである。このような鏡板と銜の連結構造の特徴は、金銀装飾を中心に検討した大久保奈奈氏のA類2式に該当している（大久保1991）。A類2式は、金銀装飾の変遷過程のIII段階にあたり、「鏡板地板の表裏いはずれかに取り付けられた連結用の別づくりの部品（連結軸）を介して、銜を鏡板に連結させる。引手は鏡板の内側で銜に連結される。組み立て後、金銀で飾った別づくりの蓋金具で、鏡板中心部から突出した銜外環、連結軸を覆い隠すため、外観上、鉄の部品は見えない」と特徴が規定されており、



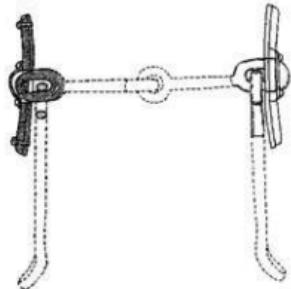
1



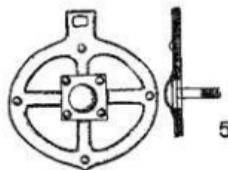
2



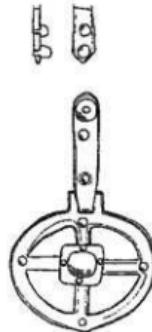
4



3



5



6

1・2 奈良県三里古墳、3 島根県岡田山1号墳、4 埼玉県牛塚古墳、5 栃木県新田大塚古墳、
6 千葉県法皇塚古墳

第13図 心葉形十字透文鏡板付簪集成図(縮尺1/4)

所産年代は6世紀中葉に位置づけられている（大久保1991 P441）。

このように心葉形十字透文鏡板付巻は、鐘形や花形（九曜紋）の杏葉・鏡板とともに6世紀後半の代表的な国産馬具のひとつであり、類例との比較から本古墳例の時期は、6世紀後葉を中心とする年代に比定しておくのが妥当と考えられる。

また、雲珠・辻金具に関しては、伏鉢が高く盛り上がった半球状で、脚を等間隔に配置し、資金具に鉄地金銅張無地のものを1本だけ使用しているなどの特徴から、宮代栄一氏の雲珠・辻金具分類の半球状多脚系雲珠・辻金具に該当する。さらに1紙半円形脚をもつことから半円形脚系に属し、時期的には第V期とされる、6世紀後葉にあたるTK43型式期後半～TK209型式期前半の時期に位置づけられている（宮代1986）。この年代観は、概ね心葉形鏡板の分析から導かれた年代観と一致している。これは先に想定した、本来セットとして使用されていたことの傍証となろう。

以上、牛塚古墳出土の馬具について検討してきが、以下に簡単にその特徴をまとめてみたい。

まず年代については、諸氏の研究成果を参考にすれば、心葉形十字透文鏡板付巻、半球形雲珠・辻金具とともに6世紀後葉～末葉を中心とする年代が想定されるものであった。また、必ずしも全体の馬具は明らかではないが、こうした馬具の組み合わせは、各地の終末期の前方後円墳から出土する比率が高く、郡単位の地域を統括する首長に相当するような、高い地位を表章する被葬者像が想像されると指摘されている（岡安1985）。今後、本古墳の歴史的意義を解明していくうえで、金銅製指輪とともに重要な糸口になるものと考えられる。

（2）須恵器

埼玉県の古墳時代後期の須恵器について、総合的な分析をおこなわれた酒井清治氏は、牛塚古墳の須恵器について以下のようにコメントされている。

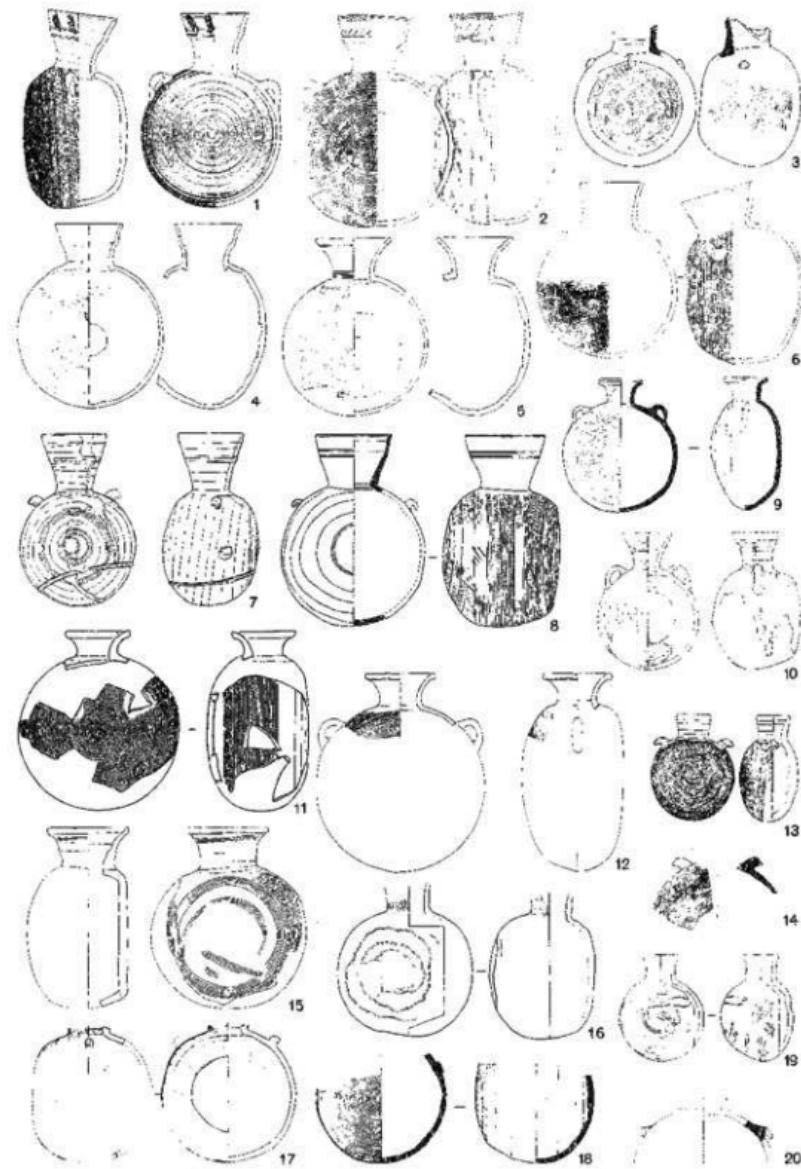
「須恵器は提瓶1、器台か脚付壺等の大形脚部1、壺1で、いずれも北側のくびれ部から出土している。提瓶は口縁部に綾の櫛目文が巡り、大形脚部は縱方向、壺は螺旋状に当間隔のカキ目を施す特徴をもつ。提瓶の口縁および脚部は、団から受ける印象よりもっと舞台遺跡のものに似ており、花園町黒田6号墳例とともにこの地域に発達した口縁といえる。3点とも白色針状物質を含み、時期は6世紀から7世紀初頭であろう。」（酒井1989 P17～18）

また南北企丘陵窯跡群の製品としては、最も南から出土した製品とも言われている。

これを踏まえ、再び牛塚古墳の須恵器を埼玉県内の事例と比較することとする。

提瓶

埼玉県内の在地産の提瓶は、窯跡の資料として滑川町羽尾窯跡（高橋1980）・平谷窯跡（藤原1982）・東松山市桜山6号窯跡（水村1982）・根平窯跡（今井1980）があり、古墳からの資料として行田市瓦塚古墳（杉崎1986）・児玉町秋山諏訪山古墳（菅谷1990）・美里町一本松古墳（中村1980）・東松山市附川8号墳（谷井1974）・桜山10号墳（小久保1981）・花園町黒田1号墳・黒田6号墳（塙野他1975）・寄居町中小前田6号墳（寄居町教育委員会1984）・小前田10号墳（瀧瀬1986）・嵐山町古里2号墳（植木1987）・桶川市川田谷ひさご塚古墳（塙野1968）・西台2号墳（塙野1970）・熊谷市権現塚古墳（寺社下1983）・三ヶ尻林4号墳（小久保1983）・坂戸市北峰5号墳（加藤1987）・深谷市上増田9号墳（澤出・古池1991）の例があり、住居の資料として東松山市舞台1号住居跡・5号住居



第14図 埼玉県内出土捉瓶集成図(縮尺1/8)

跡（谷井1974）・玉太岡遺跡（高崎1990）・嵐山東落合遺跡（酒井1989）・滑川町寺谷2号住居跡（鈴木1976）・寺ノ台2号住居跡（今井1984）等の例をあげることができる。このうちアンダーラインをつけた事例は、牛塚古墳同様、南比企丘陵窯跡群の製品である。

提瓶の把手部分は、概ね環状→鉤状→ボタン状→消滅という変化の方向性のあることが知られている。また、胴部は一方が偏平化した扁壺の形態をとり、胴部が球形となるフラスコ形瓶とは区別されている。本古墳の把手は、環状である。類例としては、桶川市西台2号墳・行田市瓦塚古墳・児玉町秋山諏訪山古墳・美里町一本松古墳・花園町黒田6号墳等が環状の把手をもつ。桶川市西台2号墳のみやや新しい傾向があるが、他の古墳は、6世紀の後葉から末葉にかけて築造されたものと考えられることから、本古墳の提瓶もこの段階と考えられよう。

小型壺

類似する資料に乏しいが、強いてあげるならば高崎市八幡觀音塚古墳出土の小型壺をあげることができる（尾崎・保坂1963）。八幡觀音塚古墳の小型壺も淡い橙色に焼き上がった製品で、大きさや口縁部の形態は類似する点が多い。

脚付壺

脚台部の上にのる壺の形態等が一切不明なので、詳しくは分からぬが、壺部との接合部に帯状の補強帶を巡らした例は、東松山市青塚古墳から出土している（金井塚・小峰1964）。青塚古墳例は、透穴が長方形にある。

小型壺や脚付壺を出土したこれらの古墳の多くは、6世紀の末葉から7世紀の初頭にかけての古墳である。以上の検討から牛塚古墳出土の須恵器群の年代は、6世紀の末葉を前後する段階に置くことができよう。

ところで本古墳の提瓶と同一の製品は、未だ窯跡でも消費地でも確認されていない。これは伴出する壺や脚付壺と同様、古墳時代後期の須恵器生産の規模が、きわめて小規模であったことに関わる。本古墳から出土した壺や脚付壺は、古墳を供給先とし「造墓を操業の契機とする生産」によって製作されたことが予測される。また一方で提瓶は、少なからず集落から出土しており、古墳時代後期の集落で提瓶を用いなければならない行為がしばしばあったことを裏付けている。また、古墳にあっても提瓶は、須恵器供獻の一翼を担っていたことも確かである。

供獻された須恵器群のなかでは、脚付壺が目を引く。しかし、本古墳は全長47mという前方後円墳としては小規模な古墳であり、6世紀末から7世紀初頭の北武藏にあっては、前方後円墳の序列のなかでは最下層にあたる。このような古墳で特殊な器形の須恵器が消費されていたことは、改めて6世紀末から7世紀初頭の北武藏における階層秩序の掘籠状態を知ることができる。

- 1 牛塚古墳、2 黒田6号墳、3 玉太岡遺跡、4 舞台5号住居跡、5 舞台1号住居跡、6 黒田1号墳、7 三ヶ尻林4号墳、8 寺谷2号住居跡、9 西台2号墳、10 一本松古墳、11 瓦塚古墳、12 秋山諏訪山古墳、13 北峰5号墳、14 ひさご塚古墳、15 上増田9号墳、16 桜山10号墳、17 附川8号墳、18 羽尾窯跡、19 枝平窯跡、20 平谷窯跡

第14図 埼玉県内出土提瓶集成図

牛塚古墳の出土遺物の調査にあたり、川越市立博物館 松尾鉄城、岡田賢治の両氏並びに川越市教育委員会 田中 倍氏には有益な御指導、御教示を賜るとともに種々御便宜を図っていただき。とりわけ、岡田氏には実測図の提供をうけた。また、同僚の福田 聖氏には遺物実測の協力をお願いした。記して感謝の意を表したい。

註

- (1) 追跡時における横穴式石室内部の大規模な改修例として、児玉郡美里町白石第5号墳が知られる(長瀧1991)。
- (2) 鉄器の分類及び名称は、文献(小久保他1983)に従った。
- (3) 薩瀬芳之氏の御教示による。

引用・参考文献

- 甘粕 錠・小泉 功 1972 「川越市史」 第1巻 原始・古代編 川越市史編纂室
今井 宏 1980 「根平」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第27集 埼玉県教育委員会
今井 宏 1984 「屋山・寺ノ台」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第32集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
岩瀬 譲 1985 「鶴ヶ丘(E区)」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第45集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
横木 弘 1987 「古里古墳群一北田遺跡・上土橋支群・駒込支群の発掘調査一」 嵐山町遺跡調査会報告2 嵐山町遺跡調査会
大久保奈奈 1991 「金銀装の轡」 滝口宏編 「古代探叢III」 P425~447 千葉大学出版部
岡田賢治 1990 「金の輪轡と銀のナイフと—川越市立博物館原始・古代コーナーの展示から—」 「川越の文化財」 第46号 P4~5 川越市文化財保護協会
岡安光彦 1985 「6~7世紀の馬具」 「考古学ジャーナル」 No.257 P16~19
岡安光彦 1988 「心形葉銀板付轡・杏葉の轡年」 「考古学研究」 第35巻第3号 P53~68
尾崎喜左雄・坂坂三郎 1963 「上野国八幡銀鏡古墳調査報告書」 群馬県埋蔵文化財調査報告書第1集 群馬県教育委員会
小渕良樹 1984 「狭山市遺跡分布調査報告書」 第2集 狹山市史編さん調査報告書13 狹山市史編さん係
檜原考古学研究所編 1977 「新沢千塚126号墳」 奈良県教育委員会
加藤恭朗 1987 「古代のさかどー坂戸市遺跡発掘調査概報Iー」 坂戸市教育委員会
金井塚良一・小峰啓太郎 1964 「東松山市青塚古墳発掘調査報告」 「台地研究」 No.14 P15~51
金井塚良一 1980 「入間地方の前方後円墳—北武藏の前方後円墳の研究(2)ー」 「埼玉県立歴史資料館研究紀要」 第2号 P131~152
金井塚良一 1987 「北武藏の埴輪の時代」 「群馬の古代を考えるシンポジウム 塩輪の時代」 P100~121 上毛新聞社
河上邦彦 1977 「平群・三里古墳」 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第33冊 奈良県教育委員会
小泉 功・今泉泰之 1974 「南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第3集 埼玉県教育委員会
小泉 功 1984 「川越市南大塚古墳群の山王塚について」 「埼玉県立川越高等学校紀要」 第21輯 P48~59
小泉 功・田中 倍 1988 「南大塚古墳群」 川越市遺跡調査会
小出義治 1963 「埼玉県どうまん塚古墳調査の概要」 「国学院高校紀要」 第5輯 P155~166
小久保 徹 1981 「桜山古墳群」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第2集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
小久保 徹 1983 「三ヶ尻天王・三ヶ尻林(1)」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第23集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

- 小久保徹・浜野一重・利根川章彦・山本慎・高橋好信・田中正夫・岩瀬謙・瀧瀬芳之 1983 「埼玉県における古墳出土遺物の研究 I - 鉄鏡について -」『研究紀要』1983 P 1~73
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 後藤守一 1937 「下野国河内郡田原村大字大塚新田所在古墳出土品」『古墳発掘品調査報告』帝室博物館学報第9冊 帝室博物館
- 後藤守一 1939 「上古時代鉄鏡の年代研究」『人類学雑誌』第54巻第4号 P 1~29
- 小林三郎・熊野正也 1976 「法皇塚古墳」市立市川博物館研究調査報告第3冊 市立市川博物館
- 駒宮史朗 1970 「狹山市今宿遺跡の調査」『第3回遺跡発掘調査報告会発表要旨』P 12~13
- 酒井清治 1989 「古墳時代の須恵器生産の開始と展開 - 埼玉を中心として -」『埼玉県立歴史資料館研究紀要』第11号 P 1~26
- 澤出晃越・古池晋裕 1991 「明戸南部遺跡群！」深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第29集 深谷市教育委員会
- 塙野博 1968 「桶川町文化財調査報告II - 川田谷ひさご塚古墳・加納入山遺跡 -」桶川町教育委員会
- 塙野博 1970 「西台遺跡の発掘調査」桶川町文化財調査報告IV 桶川町教育委員会
- 塙野博他 1975 「黒田古墳群」花園村黒田古墳群発掘調査会
- 寺社下博 1983 「中条遺跡群III 檜現山古墳・常光院東遺跡」熊谷市教育委員会
- 柴田常憲 1928 「上總君津郡青柳町の平塚」『考古学研究』第2年第1号 P 1~8
- 清水嘉作 1931 「人間部電ヶ関村牛塚発見の埴輪」『埼玉史談』第2巻第5号 P 46~47
- 城近憲市・三島剛 1972 「狹山市発見の一古墳」『埼玉考古』第10号 P 48~50
- 菅谷浩之 1990 「秋山古墳群 - 庚申塚古墳・源防山古墳の調査 -」児玉町史資料調査報告古代第2集 児玉町教育委員会 児玉町史編さん委員会
- 杉崎茂樹 1986 「埼玉古墳群発掘調査報告書第4集 瓦塚古墳」埼玉県教育委員会
- 杉崎茂樹 1992 「北武藏における古墳時代後・終末期の諸様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集 P 285~327
- 鈴木敏弘 1976 「北武藏の須恵器帳面 - 後期古墳社会の基礎的研究として -」『北武藏考古学資料図鑑』P 112~130 校倉書房
- 関義則・宮代栄一 1988 「県内出土の古墳時代の馬具」『埼玉県立博物館紀要』第14号 P 3~55
- 高崎光司 1990 「玉太岡遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第90集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋一夫 1980 「羽尾窯跡発掘調査報告書」滑川村教育委員会
- 瀧瀬芳之 1986 「小前田古墳群」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第58集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中正夫 1988 「将军山古墳出土遺物の資料調査報告(1) - 鉄鏡 -」埼玉県立さきたま資料館「調査研究報告」第1号 P 28~32
- 田辺昭三 1981 「須恵器大成」角川書店
- 谷井彪 1974 「田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川」埼玉県遺跡発掘調査報告書第5集 埼玉県教育委員会
- 谷井彪・小久保徹 1976 「鶴ヶ丘」埼玉県遺跡発掘調査報告書第8集 埼玉県教育委員会
- 千賀久 1992 「新沢千塚の遺宝とその源流」奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 東京帝室博物館 1932~1936 「埴輪集成図鑑」第1~10輯
- 長瀬康彦 1991 「白石古墳群・羽黒山古墳群」美里町遺跡発掘調査報告書第7集 美里町教育委員会
- 中村倉司 1980 「瓶蓋神社前遺跡・一本松古墳」埼玉県遺跡調査会報告第39集 埼玉県遺跡調査会
- 西尾良一 1987 「馬具の横討」鳥根県教育委員会編「出雲岡山古墳」P 102~111
- 原田大六 1958 「沖ノ島 宗像神社沖津宮祭祀遺跡」吉川弘文館
- 平岩俊哉 1991 「仙波古墳群の研究(一)」『埼玉考古』第28号 P 106~122
- 広瀬和雄 1991 「前方後円墳の畿内編年」近藤義郎編「前方後円墳集成」中編・四国編 P 24~26 Ⅲ

川出版社

- 藤原高志 1982 「平谷麻跡」 『埼玉県古代寺院跡調査報告書』 埼玉県県史編さん室
増田逸朗他 1986 『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県県史編さん室
松本富雄 1986 「入間地域」 金井塚良一編 『日本の古代遺跡31 埼玉』 P236~271 保育社
水村孝行 1982 『桜山窯跡群』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第7集 (財)埼玉県埋蔵文化財
調査事業団
宮代栄一 1986 「古墳時代碧珠・辻金具の分類と編年」 『日本古代文化研究』第3号 P33~45
山本 清 1951 『出雲市誌』 出雲市役所
寄居町教育委員会 1984 『寄居町史』 原始・古代・中世編
若松良一 1985 「比企地方の円筒埴輪」 『第6回三県シンポジウム 瓦輪の変遷—普遍性と地域性—』
P29~41 群馬県考古学談話会 千曲川水系古代文化研究所 北武藏古代文化研究会

〈追記〉

脱稿後、下記の古墳から指輪が出土していることを知った。

- 大阪府 一須賀I支群12号墳 (銀製)
〃 18号墳 (〃)
〃 20号墳 (〃)
奈良県 ホリノヲ 245号墳
〃 246号墳
長崎県 高下古墳 (金銅製)

参考文献

- 花田勝広 1994 「河内一須賀古墳群の検討」『滋賀考古』第11号
斎藤 忠 1985 『統日本古墳文化資料総覧文献篇』
1988 『統日本古墳文化資料総覧遺跡篇』

II 毛呂山町川角15号墳（旧毛呂山町78号墳）^{かわらかど}

1. 調査の目的

川角15号墳（旧毛呂山町78号墳）は、埼玉県の南西部、入間郡毛呂山町大字川角字吹上1091に所在する6世紀後葉に築造された円墳である。この古墳は、昭和35年に町道川角7号線の拡張工事に伴い墳丘の西半分が削平されることになり、その事前調査として町教育委員会によって発掘調査が実施された。調査当時は毛呂山町78号墳と呼ばれていたが、最近の分布調査によって古墳の名称が川角15号墳に変更されているため、それに従った（村木1988）。

調査を担当した田中一郎氏の報告によれば、河原石小口積の胴張り型横穴式石室を埋葬主体部とする円墳で、頭椎大刀、鉄鎌、刀子、耳環、漆塗小玉等の多数の遺物が出土したことが知られている（田中1960b・1978）。横穴式石室の遺存状態が良好で、当該地域における後期古墳の埋葬主体部の具体的な様相を示す調査例として重要な位置を占めている。また、入間郡内では坂戸市新町古墳群の調査（田中1960a）に次ぐ本格的な学術調査として研究史上著名である。

小稿は、現在毛呂山町教育委員会に所蔵されている本古墳出土遺物の観察及び実測調査の成果を報告し、越辺川流域における後期古墳の基礎的なデータの作製を目的とするものである。

2. 位置と周辺の遺跡

川角15号墳の含まれる川角古墳群は、越辺川の右岸に広がる毛呂台地の北東縁辺に位置する。沖積地を臨む台地縁辺部に円墳群が帶状に分布しており、最近の分布調査の成果によれば現在38基の円墳の所在が確認されている（村木1988）。古墳の規模は、直径が20mを越すものが多く、いずれも直徑が15mに満たない小規模な円墳によって構成されている。とりわけ、直徑10m以下のものが13基と多いことが特徴の一である。現状では群内に前方後円墳は認められず、5基の前方後円墳が比較的狭い範囲に繼起的に築造された苦林古墳群とは、極めて対照的な在り方を示している（田中・大谷1989）。

川角15号墳は、現状では直徑12.9m前後の墳丘の一部を残しているが、墳丘の西側約3分の2が破壊されているため、石室は現存していない。古墳群の分布域のほぼ中央部に位置し、川角14～18号墳の5基が近接して小支群を形成している。その墳丘規模は、群内において傑出したものではなく、一般的な大きさである。

この他に発掘調査の実施された古墳として吹上古墳（川角6号墳）が所在する。吹上古墳は、古墳群の西側に位置し、昭和40年に城西大学学術調査室の貞末亮司氏によって調査されている（貞末1987）。直徑14.5mほどの葺石を施した円墳で、川角15号墳に類似した河原石小口積の胴張り型横穴式石室を埋葬主体部とする。石室内部からは鉄鎌、石製小玉、石製勾玉、耳環、刀子等の副葬品とともに土師器比企型壺、須恵器短頸壺が出土した。鉄鎌の様相から川角15号墳に後出する7世紀初頭頃の築造と想定される。現在までに、この2基のみが調査されているだけで、本古墳群の群構成や形成過程について十分な検討をおこなうことはできないが、出土遺物や石室構造の特徴から6世紀後半から7世紀に亘って継続的に形成された古墳群と考えられている。



川角古墳群（8）・苗木原遺跡（50）・稻荷台遺跡（49）・西ノ久保遺跡（51）
西ヶ谷北遺跡（48）・夢徳寺跡（39）

第15図 川角古墳群分布図(村木 1988)

次に、本古墳群の分布範囲については、古墳群の南側に所在する苗木原遺跡から昭和28年に石室状の石組遺構が発見され、その中から直刀が出土していることや、北側に位置する堂山下遺跡から盾形埴輪の破片が採集されていることを勘案すると(宮瀬1991)、かなり広い範囲に分布域が拡大することが予想される。さらに、東側に近接する大類古墳群との間に位置する宿浦遺跡からも円筒埴輪の小片が採集されており、この二つの古墳群は帶状につながり、本来は100基を越す一大古墳群を形成していた可能性が指摘されている(村木1988)。

さて、周辺の古墳時代の様相については、前稿の中で簡単にふれておいたのでそれを参照していくことにして、ここでは最近の研究動向と調査例を踏まえて本古墳群をめぐる研究状況について概観していくことにする。

川角古墳群の対岸にあたる越辺川上流域左岸の段丘上には、西戸古墳群が位置している。現在15基ほどの古墳の所在が確認され、昭和61年と平成3年の2回に亘って発掘調査がおこなわれた。西戸2号墳は凝灰岩質砂岩の切石を用いた胴張り型横穴式石室を埋葬主体部とし、金環3、ガラス小

玉10数個、須恵器長頸壺1、土師器壺の破片が少量出土している（佐藤1991）。この古墳は、明治26（1893）年に地元の有志によって発掘がおこなわれ、刀、鉄鏃、金環が出土した様子が、墳頂部に建てられた石碑-「西戸古塚記」一に刻まれている（池上1989）。当古墳群ではこうした横穴式石室墳のほかに、河原石を用いた小型石櫛墓や箱式石棺などの低（無）墳丘墓も検出されており、当該地域における古墳時代終末期の墓制や社会構造を考えるうえで重要な問題を提起している（今井・橋口1987）。

川角古墳群の下流に位置する苦林古墳群は、坂戸市と毛呂山町にまたがって分布しているため坂戸市に所在する塚原古墳群（前方後円墳3基、円墳11基）と毛呂山町に所在する大類古墳群（前方後円墳2基、円墳38基）の二つに便宜的に区分されている。しかし、この二つの古墳群は本来同一の古墳群として把握されていることから、現在の行政区画を越えて古墳群を総称する場合には苦林古墳群と呼ぶことが提唱されている（今井・橋口1987）。

大類古墳群における考古学的な調査としては、昭和62年に大類38・39号墳が発掘調査され、須恵器大甕、土師器壺・甕等が出土している（村木1990）。翌年の昭和63年には筆者らによって大類1号墳の墳丘測量調査が実施され、全長24.2mを測る小規模な前方後円墳であることが明らかにされた（田中・大谷1989）。さらに、平成元年には古墳詳細分布調査の一環として県立さきたま資料館によって大類2号墳の試掘調査が実施されている（谷井1991）。開墾のため本来の形を大きく変形しているが、前方部と後円部の中心部を残存し、墳丘長26m、幅8.5m、後円部高さ2.2mを測ることが判明した。調査では土師器壺、須恵器大甕、埴輪等が出土し、土師器壺の特徴から6世紀前半から中ばの築造と想定されている。

なお、地元には昭和初期の開墾の際に出土したと伝えられる直刀2、無窓鏡2、鉄鏃4、銅鏃2、耳環15、勾玉4、管玉1、切子玉4、ガラス小玉1等の古墳出土遺物が残されている。

一方、塚原古墳群に関する近年の研究動向としては、杉本良氏によって塚原2号墳出土の頸部に補強突帯をもつ須恵器大甕が報告され、在地産須恵器の問題点について検討が加えられている（杉本1992）。また、平成4年には『坂戸市史』古代史料編が刊行され、坂戸市域における古墳の具体的な様相がまとめられた（坂戸市1992）。その中で塚原古墳群に関しては、塚原1号墳出土の大型円筒埴輪や塚原1・2号墳等の墳丘測量図が公表されており、今後の研究における基礎的資料がようやく出揃い始めた段階と言える。

苦林古墳群の対岸に位置する鳩山町十郎横穴墓群は、現在3基の横穴墓が開口しているが、このうち1・2号墓が平成2年に実測調査された（金井塚1991）。横穴墓の平面プランは矩形を呈し、天井はドーム形のもので床面には小ピット、排水溝等が設けられていた。横穴墓の造墓年代については出土物が全く無いため不明であるが、当該地域における横穴墓群の実態が明らかにされたことは特筆されよう。

最近、苦林古墳群の創出基盤の一つと推定される坂戸市長岡遺跡（加藤1987）と入西古墳群の創出基盤と推定される入西遺跡群の坂戸市金井遺跡（星間1990）、塚の越遺跡（星間1991）、桑原遺跡（村田1992）、稻荷前遺跡（富田1992）等の古墳時代後期を中心とする集落跡の調査例が相次いで報告された。今後は古墳群の形成過程と創出基盤としての集落の関連性について検証していくことが



川角古墳群（A）・四戸古墳群（B）・苫林古墳群（C）・菩能寺古墳群（D）・大河原古墳群（E）・
三福寺古墳群（F）・北峰古墳群（G）・成願寺古墳群（H）・淡羽町古墳群（I）・八幡古墳群（J）・
新山古墳群（K）・片柳古墳群（L）・新町古墳群（M）・鹿鳴古墳群（N）・梶平古墳群（O）・鷺台
古墳群（P）・高坂古墳群（Q）・横山古墳群（R）・田木山古墳群（S）・川角15号墳（1）・吹上古
墳（2）・塚の越1号墳（3）・入西石塚古墳（4）・上経神社古墳（5）

第16図 川角古墳群周辺遺跡分布図 (S = 1 : 50,000)

大きな課題と言えよう。

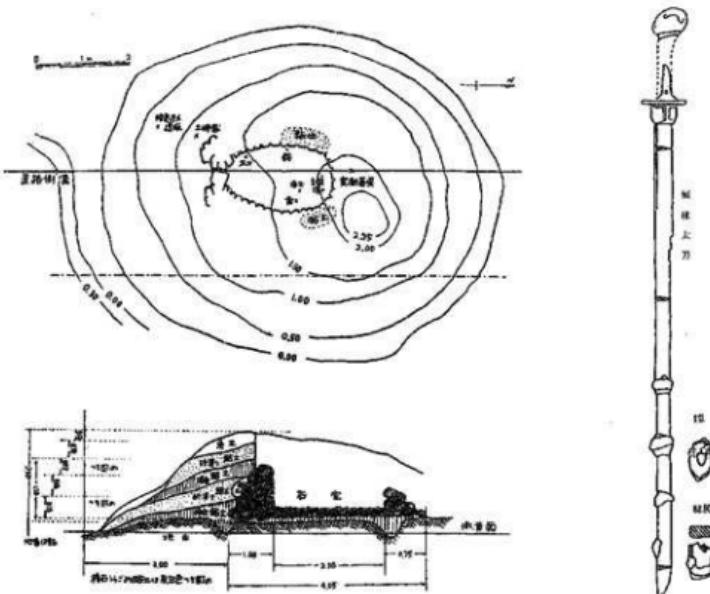
3. 既往の調査概要

昭和35年に実施された本古墳の調査概要について、田中氏の報文をもとに墳丘、埋葬主体部、出土遺物等について簡単に紹介しておきたい。

先述したように本古墳は昭和30年から5ヶ年計画で実施された県下第一斎の古墳分布調査の成果に基づき、調査当時は毛呂山町78号墳と呼ばれていた(大護1961)。発掘調査は、昭和35年1月9日から12日の4日間に亘り、田中一郎氏を担当者として毛呂山町教育委員会によって実施された。

墳丘の規模は、南北9.6m、東西7m、高さ2.25mを測る円墳で、褐色の良質粘土と砂混じりの粗粘土を30cm程の厚さで版築状に堅くつき固め、それを互層に積み上げて築成されていた。

埋葬主体部は、ほぼ南に向かって開口する河原石小口積の胴張り型横穴式石室である。石室の内部には天井石と考えられる凝灰岩が崩落していたが、壁体部分の残りは比較的の良好で壁体構成の状態を観察することができる。奥壁には所謂「鏡石」などの大型石材は用いず、人頭大の大きさの転石のみを用いて壁体が構築され、その隙間には小石が充填されていた。玄室の平面プランは、最大幅を玄室の中央部にもつ長胴形の胴張りプランで、奥壁もカーブを描く特徴的なものである。石室各部の計測値は、全長2.3m、奥壁幅1m、最大幅1.27m、羨道幅0.42mをそれぞれ測る。



第17図 川角15号墳 墳丘測量図・頭椎大刀(田中 1960 b・1978)

葬道は、同じく河原石の小口積によって構築された短いものである。葬道の閉塞は、拳大の門櫛を灰白色の粘土につきませて外側から押し込んでおこなっていた。閉塞石の隙間からは、須恵器壺の副部片が出土しており、埋葬儀礼の一端を窺うことができる。

石室床面は、つき固めた褐色粘土の上に河原石を並べ、その上面に小砂利が10cm位の厚さで敷かれていた。遺物はこの砂利面から主に出土し、埋葬状態を比較的良好にとどめていた。

出土遺物は、奥壁寄りの位置から耳環2個と漆塗土玉11個がまとめて出土した。また、土玉に混じって小白歯1個が発見されていることから、頭部を北に向かって被葬者が埋葬されていたと推測される。石室西側壁寄りからは、刀子の断片と30数本の鐵鏃が一括して出土している。さらに、西側壁の玄門寄りからは切先を入口に向けて置かれた直刀1振が検出された。出土当初、この直刀には金銅装の頸椎柄頭と鞘尻が着装されていたと報告されているが、残念ながら発掘中に盗難に遭い、現在は刀身と鐔だけが残されている。

他に前庭部から土師器壺、須恵器壺断片、プラスコ形提瓶等が出土している。

4. 遺物各説

本古墳から出土した遺物は、現在一括して毛呂山町教育委員会に所蔵されている。今回の調査で確認した遺物の種類と数量は以下の通りである。

直刀1、無窓鐔1、鐵鏃37、刀子1、不明鉄製品1、耳環5、

漆塗土玉11、須恵器プラスコ形提瓶1

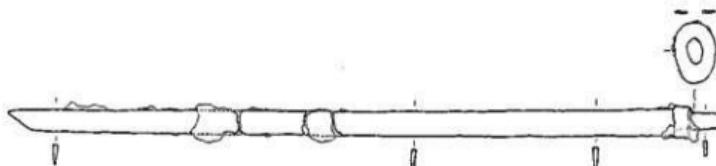
このうち直刀（第18図）は既に村木氏によって公表されている（村木1988）、今回は実測調査をおこなった鐵鏃・刀子・用途不明鉄製品・耳環・漆塗土玉を取り上げて説明していく。

（1）鐵鏃（第19・20図1～37）

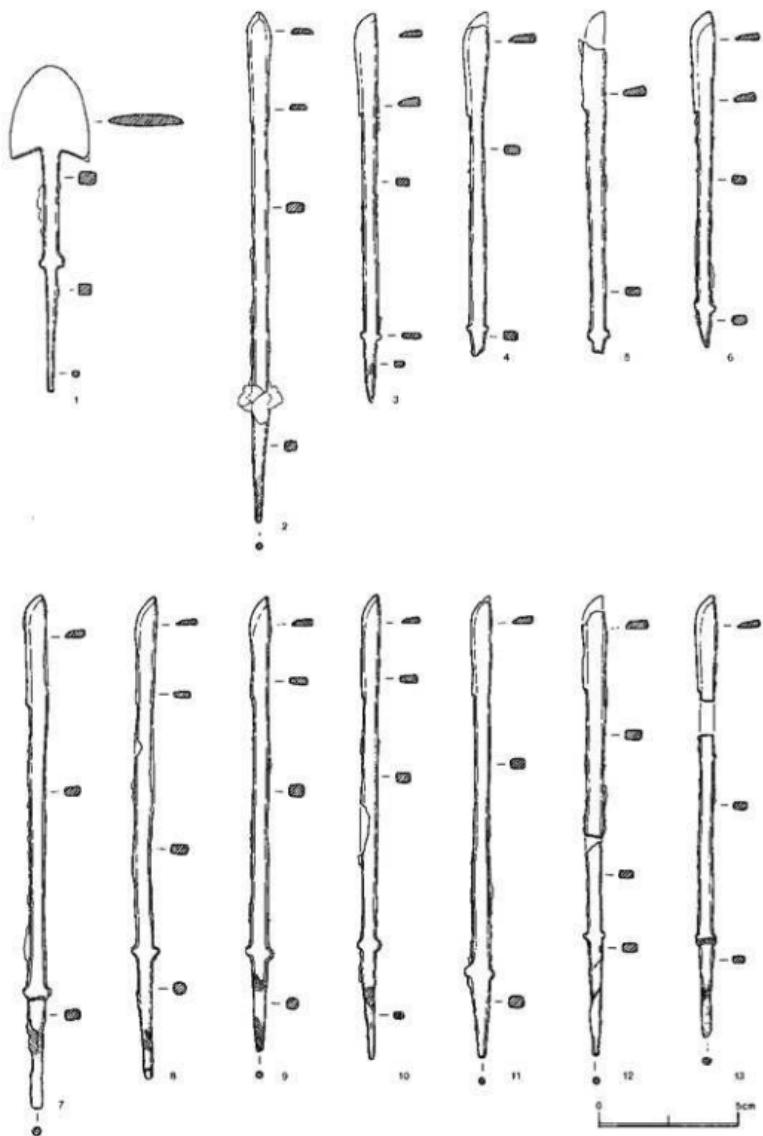
出土した鐵鏃のうち実測図示できたものは合計37点を数える。このうち鏃身部の形態のわかるものは約20点である。鏃身部の形態によりI類 短頸棘範被腸抉両丸造長三角形式、II類 長頸棘範被片切刃造柳葉式、III類 長頸棘範被片切刃造片刃箭式の3形式に大きく区分することができる。さらにIII類の片刃箭式は、頸部の長短によってIIIa類・IIIb類に細分される。以下、各類の特徴について説明する（註1）。

I類 短頸棘範被腸抉両丸造長三角形式（1）

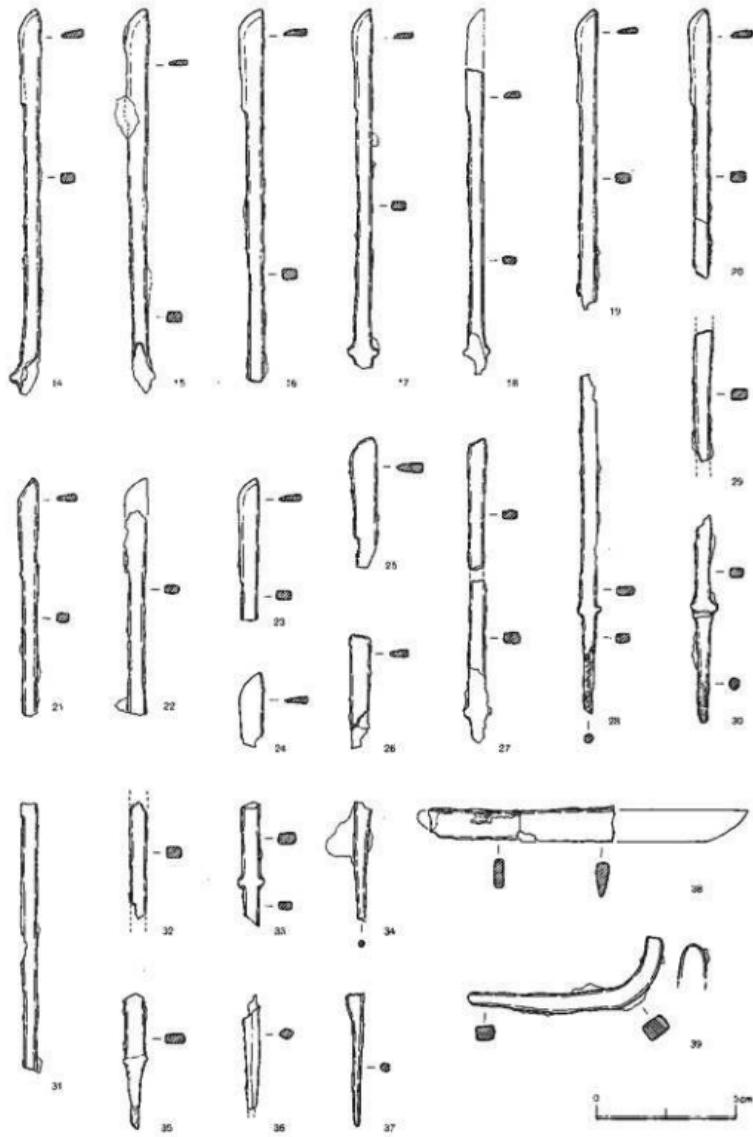
1点だけの出土である。鏃身部は長さ3.4cm、幅2.8cmを測る長三角形を呈し、刃部の鋒い両丸造



第18図 直刀(縮尺1/6・村木 1988)



第19図 鉄鎌(1)



第20図 鉄鏃(2)・刀子・不明鉄製品

である。脇抉はあまり深くない。頸部は厚みをもつ断面矩形を呈し、長さ4.2cmを測る。棘状突起は幅広でしっかりした造りである。茎は現存長4.5cmを測り、先端に向かって次第に細く尖り、断面矩形を呈する。現存長11.6cm、重量17.5g。

II類 長頸棘管被片切刃造柳葉式（2）

1点だけの出土である。鎌身部は長さ3.9cm、幅0.8cmを測る。先端部にふくらをもつ柳葉式で、刃部は鋭く、闊の近くまで明瞭に認められる。頸部は長さ約10cmを測り、断面は偏平な矩形を呈する。棘状突起は鱗に覆われ明確ではない。茎は長さ4.3cmを測り、先端に向かって次第に細くなり、先端部で断面円形となる。茎の表面に樹皮を巻いた痕跡が残る。現存長18.2cm、重量13.5g。

III類 長頸棘管被片切刃造片刃箭式（3～25）

III a類は、頸部の長さの短いものを一括した（3～6、24・25）。全体の形状のわかるものは3～6の4点で、他に鎌身部破片24・25がある。鎌身部は長さ3.6cm、幅0.9cmを測り、ふくらのある滑らかな曲線を描いた刃部をもち、闊には浅い逆刺がある。頸部は偏平な断面矩形を呈し、長さ7.1～7.7cmのばらつきが認められ、平均で7.6cmを測る。棘状突起はやや短い。茎の形状がわかるのは3・6の2点しかないが、長さ1.3～2.2cmと短いもので、先端に向かって尖る。なお、3の茎には樹皮を巻いた痕跡が一部残る。3は現存長13.9cm、重量9.5g。6は現存長12cm、重量7.5g。

III b類は、III a類に比べ頸部の長いものを一括した（7～23・26）。出土した鉄鎌の主体を占めるもので、少なくとも20本以上が副葬されていたと推定される。鎌身部は長さ3.4～4cm、幅0.7～0.9cmのバラつきがみられるが、長さ3.6cm前後に集中しており、規格性の強い一群である。III a類に比べ、やや細身で刃部も直線的になり、段状の小さな闊がつく。片切刃造で、先端部は刃幅もあり鋭いが、闊に近い部分では刃部が厚く、鈍くなる。頸部は偏平な断面矩形を呈し、長さ8.7～10.3cmで、その平均は9.4cmを測り、III a類に比べ1.8cm前後長い。棘状突起は小さく短い。茎は11のようにIII a類に類似する短いものもあるが、全体としては細長い造りのものが多い。茎には樹皮を巻いた痕跡や、矢柄の木質を残すものがみられる。なお、26は銹化のため残りが悪く、鎌身部の形状が不明瞭であるが、おそらく刃の端部を折損したものと考えられる。

7は現存長18.3cm、重量13.5g。8は現存長17.2cm、重量10.5g。9は現存長16.2cm、重量13.5g。10は現存長16.6cm、重量11.5g。11は現存長16.3cm、重量14.1g。

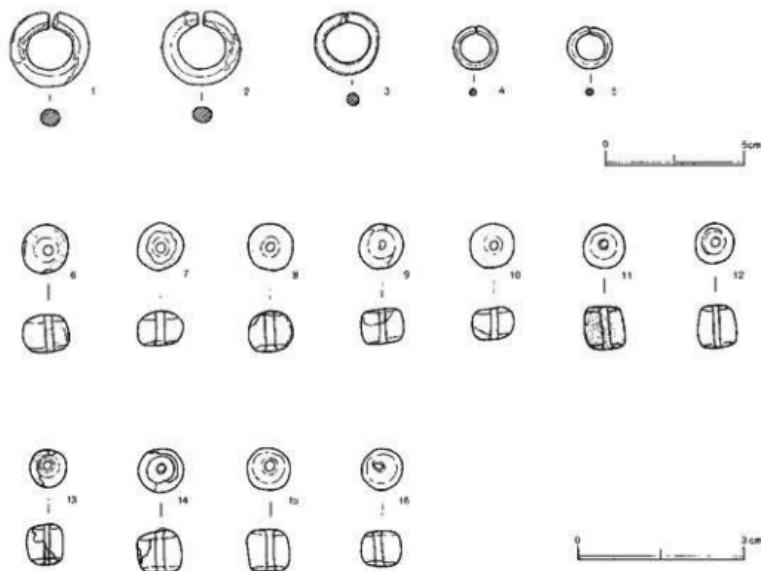
27～37は頸部から茎にかけての破片を一括した。小片が多く、どの形式に属するかは明確ではない。35がIII a類と考えられる以外は、ほとんどがIII b類の破片と推定される。28・30の茎には樹皮巻きが一部遺存している。

（2）刀子（第20図 38）

刀子は1点出土している。切先と茎尻を欠損し、現存長6.7cmを測る。平棟平造の刀身部は、断面二等辺三角形を呈し、幅1.2cm、棟幅0.4cmを測る。刃側に闊をもつ片闊と推定される。茎は幅1.1cm、厚さ0.3cmを測り、断面矩形を呈する。表面には柄木の木質が一部付着している。

（3）不明鉄製品（第20図 39）

緩やかにL字形に折れ曲がった長さ8.1cmほどの用途不明鉄製品である。ほぼ完存しているものの、全体に銹化が進行している。両端部に丸みをもつことから、鎌や釘等の緊縛金具でないことは



第21図 装身具(耳環・漆塗土玉)

明らかである。その用途については現状では不明である。断面形は矩形を呈し、幅0.7~0.8cm、厚さ0.5~0.6cmを測る。

(4) 耳 環 (第21図1~5)

耳環は合計5点が出土している。形状及び大きさなどから1・2、4・5がそれぞれ対をなすものと考えられる。

1は径2.8×2.6cmの大きさで、断面は7×5mmのやや太身の楕円形を呈する。装着部の隙間は2mmほどである。表面には金箔等はまったく残っておらず、緑銅が付着し地金の一部がみえる。2は1とほぼ同形同大で、径2.8×2.6cmを測り、断面は7×5mmの楕円形を呈する。装着部の隙間は2mmほどである。表面にはまったく金箔等はみられず、全体に緑銅に覆われている。3は径2.3×2.2cmの略円形を呈し、断面は径約4mmのやや細身の略円形のもので、対になるものは検出されていない。全体に残りが悪く、緑銅に覆われる。4は径1.6mmの略円形を呈する小型のもので、装着部は接着している。断面は径2.5mm前後の細身の円形を呈する。表面にわずかに金箔が残っているが、全体に緑銅に覆われる。5は4と同形同大のもので、径1.6×1.5mmの略円形を呈する。断面は、径2.5mmの大円形を呈する。表面は全体に緑銅に覆われている。

(5) 漆塗土玉 (第21図6~16)

漆塗土玉は合計11点が出土している。大きさは径6.5~9mm、厚さ5.5~8mm前後である。形状は

6～8の3点は球形に近いが、9～16の8点は上下端面に小さな平坦面をもち、とりわけ11～15の5点は厚みをもつ。焼成はいずれも良好で、暗灰褐色に焼き上がり、表面には光沢のある漆黒色の黒漆が塗布されている。漆の残り具合は6～8、11・12の5点は良好に遺存しているが、他は斑状に残す。また孔の周囲は、焚着時の摩擦により黒漆が剥離しているものが多い。孔径は1～2mm前後で、すべて焼成前に両面から穿孔されている。

5. 遺物の検討—まとめにかえて—

今回の川角15号墳出土遺物の再検討の成果としては、長頸鎌を主体とする鉄鎌組成の特徴から、当該地域における鉄鎌変遷の6世紀後半代の基準資料として再確認されたことが特筆される。さらに、耳環・漆塗土玉等の装身具の出土状況の分析から、埋葬状況の復元について新知見を得ることができた点などがあげられる。

最後に、鉄鎌と装身具について若干の検討を加え、本古墳の年代的位置づけを中心に問題点を整理し、まとめとしたい。

(1) 鉄鎌

前述したように鉄鎌は、鎌身部の形態から大きく3形式に区分することができる。再述すれば、I類 短頸棘範被腸抉両丸造長三角形式、II類 長頸棘範被片切刃造柳葉式、III類 長頸棘範被片切刃造片刃箭式である。さらにIII類は頸部の長短によってIIIa・IIIb類に細分することができる。

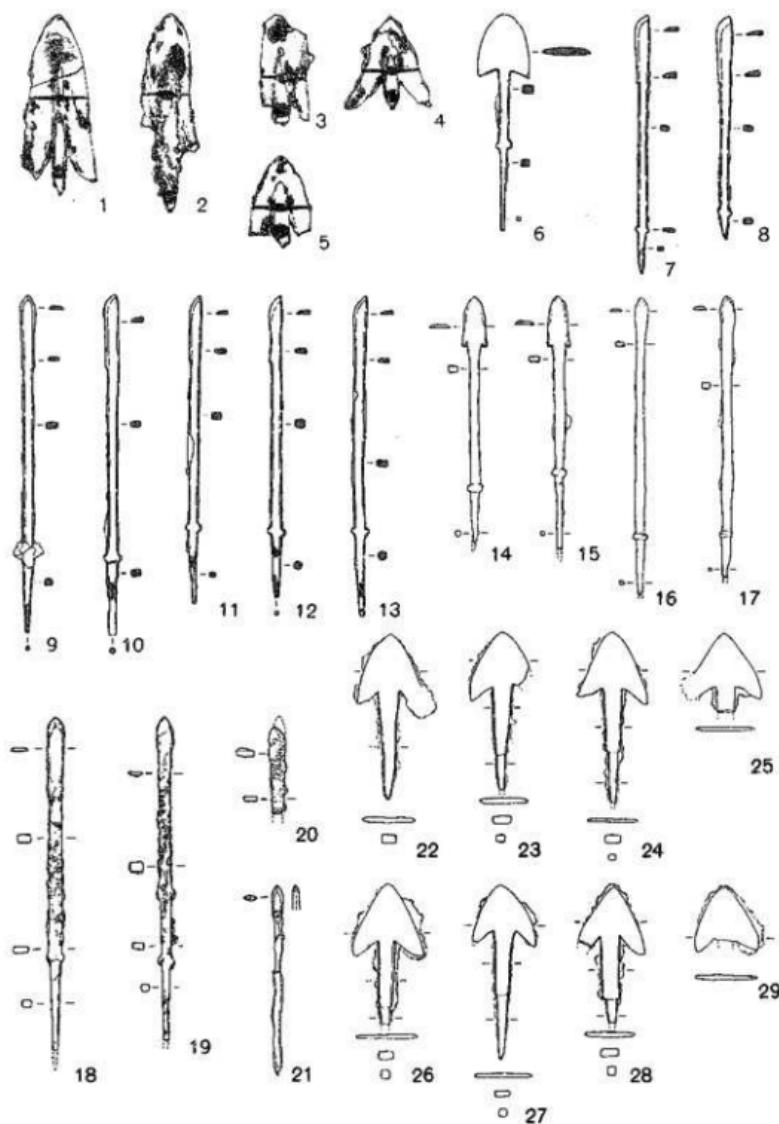
その組成をみると、鎌身部の形態のわかる20本のうち、III類が約90%と主体を占め、I・II類はそれぞれ1本ずつの副葬と大きな偏りが認められる。本墳の場合、追葬や後世の擾乱により、単位埋葬に伴う鉄鎌群の把握が明確でないため問題を残しているが、I・II類の在り方には、矢鎌の副葬に伴い何らかの選択的の意図が働いた可能性を十分考えることができる。とりわけ、I類は類例の少ない形式であることから、儀仗的な性格が想定される。

次に、各類ごとに類例との比較を通して、年代的位置づけについて若干検討したい。

まず、I類の特徴は鎌身刃部の幅の広い、いわゆる広鋒で、頸部が重厚な造りであることが指摘される。こうした特徴を示す類例として県内では、児玉町長沖8号墳(音谷他1980)、美里町塚本山22号墳(増田他1977)、川本町鹿島1号墳(塩野他1972)等が知られる。長沖8号墳例は鎌身部の形態や大きさは類似しているが、頸部の幅が広く、偏平な造りである。塚本山22号墳例は頸部が短くなり、鎌身部は片丸造で刃部が角張り、次期に盛行する五角形式に類似している。鹿島1号墳例は頸部と茎の境に棘状突起の無い形式で、鎌身部は腸抉が深く食い込み、飛燕式に近い形態を呈している。これらは、鎌身部の断面形や棘状突起の有無など細部に差異が認められ、必ずしも同一系列として扱い難いが、鎌身部の形態変化の方向性を窺うことができる。

このうち長沖8号墳例が最も本例に類似しており、時期的にも同じ段階と推定される。長沖8号墳は埴輪を有する前方後円墳で、横穴式石室を埋葬主体部とし、出土遺物等の特徴から6世紀後葉の築造と考えられており、I類もほぼ同時期に位置づけられる。

さて、長頸鎌に属するII・III類は、後期古墳から出土する鉄鎌としては最も普遍的な存在であり、殺傷力の強い実戦用の鉄鎌と看されている。



1～5 入西石塚古墳、6～13 川角15号墳、14～17 吹上古墳、18～20 西戸14号墳、21 西戸
9号墳、22～29 大河原2号墳

第22図 越辺川流域における鉄器集成(縮尺1/3)

II類に類似する例として、花園町黒田11号墳例があげられる（塙野他1975）。黒田11号墳例はII類に比べ鐵身部の鋸が明瞭で、闊も深くやや古相を呈している。利根川草彥氏は、黒田11号墳の築造年代を6世紀中葉以降に位置づけていることから、後出する様相を示すII類の年代は、6世紀末葉以降に位置づけるのが妥当であろう（利根川1989）。

III類は、遺物各説の中で記述したように鐵身部の形態及び頸部の長短によって明確に二分することができる。その特徴を略述すれば、III a類は鐵身部がふくらのある滑らかな曲線を描く刃部をもち、闊には浅い逆刺が付き、頸部の短い一群。III b類は鐵身部がやや細身で刃部も直線的となり、段状の小さな闊を造り出し、III a類に比べ頸部の長伸化した一群である。単位埋葬時の鉄鎌の組み合わせが明確でないため確証は得られないが、鐵身部及び闊の形態から、III a類→III b類と基本的には変化したものと想定される。6世紀後半から7世紀前半を中心とする時期の片刃箭式の型式変化の方向性として、棘状突起の普遍化、片切刃造の出現、鐵身闊部の逆刺の消滅及び直角闊の定型化などの特徴が指摘されており、III a類にみられる鐵身闊の逆刺の残存や刃部のふくらの形などから、概ねIII a類からIII b類への時間的推移が首肯される（関1986・杉山1988）。

以上、鉄鎌について検討してきた結果、III類の特徴からみて、少なくとも2時期の様相が想定された。ここでは、III a類に代表される時期を1期、III b類に代表される時期を2期に便宜的に区分しておく。各時期のセット関係は、出土状況が不明なため明確にし得ないが、I類とIII a類、II類とIII b類がそれぞれ共存した可能性が強いものと思われる。各時期の年代は、類例との比較から1期を6世紀後葉を中心とする時期、2期を6世紀末から7世紀初頭の時期にそれぞれ位置づけておきたい。

最後に、越辺川流域の鉄鎌の様相について瞥見し、本古墳の位置づけについて若干検討する。

越辺川流域における鉄鎌を出土した古墳としては、6世紀初頭の前方後円墳、坂戸市入西石塚古墳が最も古い例である（大腹1961、今井・橋口1988）。大型の無茎脚快柳葉式と無茎脚快三角形式が出土しており、長頸鎌が主流となる前段階の様相を示している。

6世紀前半から中頃に位置づけられる良好な資料は今のところ見当たらず、鉄鎌の変遷過程を追うことはできないが、苦林古墳群や三福寺古墳群などには埴輪をもつ古墳の所在がいくつか確認されており、今後当該期の良好な資料の検出が期待される。

6世紀後葉以降は、越辺川流域の各地区に群集墳が築造され、鉄鎌の出土例が増加する。川角15号墳に代表される6世紀後葉から7世紀初頭の段階では、片刃箭式・柳葉式を主体とする長頸鎌が主流となり、それに後世の上差矢的な性格をもつ広根系鎌が數本セットとなって副葬された様相が窺われる。

7世紀前半に築造された毛呂山町吹上古墳（貞末1987）、同西戸14号墳（今井・橋口1987）では片刃箭式に替わり、棘笠被片丸造箭箭式が主体を占めている。さらに、吹上古墳では数本の長頸棘笠被脚快片丸造柳葉式が伴出している。また、この時期には坂戸市塙の越遺跡第40号住居跡等から長頸鎌の出土例が知られ、群集墳の創出基盤の様相が推察される（嵯間1991）。

7世紀中～後半の毛呂山町西戸9号墳では、棘笠被両丸造端刃箭箭式1本のみの確認であるため具体的な様相は不明であるが（田中・大谷1988）、同時期の坂戸市大河原2号墳では、飛燕式に近い

脇抉の深い短頸腸抉平造三角形式が8本まとめて出土しており注目される(加藤他1988)。ほぼ同一規格の製品であり、鉄鎌の供給関係などの点で今後問題となる資料である。

(2) 装身具

装身具としては、耳環5、漆塗土玉11が出土している。出土した耳環の数量からみて少なくとも3体の被葬者が埋葬されていたことが推測される。また耳環の大きさや材質には明確な差異が認められることから、被葬者の性別や年令、あるいは階層差に応じて耳環が装着されていた可能性も考えられる。棺体配置に関しては、先に記したように葬身具類や遺存した人骨片の出土状況から奥壁に頭を向けた主輪並列葬の蓋然性が高いものと考えられる。

さらに、少量ではあったが漆塗土玉が出土し、その他の玉類が出土していない点が注意される。漆塗土玉は、「練玉」とも呼ばれ、表面に漆様の黒色被膜を塗布した素焼きの土製丸玉である。このような黒漆を塗布した丸玉や棗玉は、群集墳の盛行する6世紀中頃から7世紀前半の中小規模の古墳から多く出土している。こうした土製玉類は、当該期における玉素材の多様化及び古墳被葬者階層の拡大に伴う需要増により、入手の限定された瑪瑙製勾玉、水晶製切子玉、ガラス玉などの稀少品の補完的な役割を担って出現したものと推測される。管見にふれた例では、一古墳からの出土個数をみると数個から100個前後を出土した例が知られているが、その多くは數個から10数個に集中している。

周辺における土製玉類の出土例には、6世紀後半の東松山市藤訪山4号墳から碧玉製管玉4、ガラス小玉22とともに土製棗玉6、土製丸玉28が出土しているのをはじめ(金井塚1970)、7世紀前半の東松山市上川入古墳から土製棗玉3、土玉19が出土している(山本1991)。これらの例から素材の異なる複数種の玉類との組み合わせによって、頸飾りなどの装身具として用いられたものと推察される。本古墳の場合、耳環と一緒に出土しており頸飾りの蓋然性が高いが、11個と頸飾りとともに数がやや少ないため、使用例の復元については今後の検討課題としたい(註2)。

毛呂山町教育委員会 村木 功・佐藤春生の両氏には、出土遺物の実見にあたり多大な御配慮をいただいた。記して感謝を申し上げる。さらに、田中一郎先生には報告の機会を与えて下さり、心から御礼申し上げます。また、当事業団古墳部会の諸氏には日頃より多くの恩恵を得ている。とりわけ、小久保 徹、田中正夫、瀧瀬芳之の各氏からは鉄鎌に関して多くの御教示・御助言を賜った。深く感謝の意を表したい。

なお本稿は、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団の「平成3年度研究助成」による研究成果の一部である。

註

- (1) 鉄鏃の分類及び名称は、文献(小久保他1983)を参照した。
- (2) 出土状態から実際の使用例の復元される例として、5世紀後半の熊谷市三ヶ尻林4号墳から統計95個を数える土玉が出土した例が知られる(小久保1983)。横穴式石室の玄門寄りから大きく4群に分かれ検出されたもので、特に土玉3群では26個の土玉が連珠状の状態でみつかっている。

引用・参考文献

- 池上 哲 1989 「古墳開連碑文小考」 『立正考古』 第29号 P19~24
- 今井 実・橋口尚武 1987 「松の外遺跡・西戸古墳群」 毛呂山町埋蔵文化財調査報告書第4集 毛呂山町教育委員会
- 加藤恭朗 1987 「古代のさかどー坂戸市遠跡発掘調査概報I」 坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗他 1988 「坂戸市遠跡群発掘調査報告書第1集」 坂戸市教育委員会
- 金井塙厚志 1991 「埼玉県比企郡鳩山町十郎横穴墓群」 鳩山町教育委員会
- 金井塙良一 1970 「蹴訪山古墳群」 考古学資料刊行会
- 小久保 徹 1983 「三ヶ尻大王・三ヶ尻林(1)」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第23集(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 小久保徹・浜野一重・利根川章彦・山木慎・高橋好信・田中正夫・岩瀬謙・瀧瀬芳之 1983 「埼玉県における古墳出土遺物の研究 I -鉄鏃について-」 『研究紀要』 1983 P 1~73 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 坂戸市 1992 「坂戸市史」 古代史料編
- 佐藤春生 1991 「毛呂山町西戸2号墳へ越辺川流域の終末期古墳の発掘成果~」 『埋文さいたま』 第5号 P 6~7 埼玉県立埋蔵文化財センター
- 貞永堯司 1987 「吹上~吹上古墳発掘調査報告」 城西大学入間地区学術調査報告第1輯 城西大学学術調査室編
- 塙野 博他 1972 「鹿島古墳群」 埼玉県埋蔵文化財調査報告第1集 埼玉県教育委員会
- 塙野 博他 1975 「黒田古墳群」 花園村黒田古墳群発掘調査会
- 菅谷浩之他 1980 「長沢古墳群」 児玉町文化財調査報告書第1集 児玉町教育委員会
- 杉本 良 1992 「埼玉県人間郡吉林古墳群出土の須恵器」 『埼玉考古』 第29号 P 93~101
- 杉山秀宏 1988 「古墳時代の鉄鏃について」 檜原考古学研究所編『檜原考古学研究所論集』 第8 創立50周年記念 P 529~644 吉川弘文館
- 関 義則 1986 「古墳時代後期鉄鏃の分類と編年」 『日本古代文化研究』 第3号 P 5~20 P H A L A N X -古墳文化研究会-
- 大護八郎 1961 「古墳調査報告書 第5編 入間地区」 埼玉県教育委員会
- 田中一郎 1960 a 「新町古墳の調査概報」 埼玉県入間郡坂戸町字新町一 『考古学雑誌』 第45卷第4号 P 63~65
- 田中一郎 1960 b 「毛呂山町78号墳の調査概報」 『考古学雑誌』 第46卷第1号 P 66~69
- 田中一郎 1978 「毛呂山町の古墳」 『毛呂山町史』 P 16~21 毛呂山町史編さん室
- 田中広明・大谷 敦 1989 「東国における後・終末期古墳の基礎的研究(1)」 『研究紀要』 第5号 P 71~138 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 谷井 鮎 1991 「古墳群分布調査報告1」 埼玉県教育委員会
- 富田和夫 1992 「稻荷前遺跡(A区)」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第120集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 利根川章彦 1989 「後期古墳の武器保有と軍事編成に関する一試論(中)」 『土壤考古』 第13号 P 117~137
- 畠間孝志 1989 「金井遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第86集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 畠間孝志 1991 「塚の越遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第101集 (財)埼玉県埋蔵文化財

調査事業団

- 増田逸朗他 1977 『塙本山古墳群』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集 埼玉県教育委員会
宮瀬文二 1991 『兎山下遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第99集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
村木 功 1988 『毛呂山町の遺跡—遺跡詳細分布調査報告書一』 毛呂山町埋蔵文化財調査報告書第5集 毛呂山町教育委員会
村木 功 1990 『毛呂山町町内遺跡群発掘調査報告書I—白哉・延命寺北・大頬古墳群・まま上一』 毛呂山町埋蔵文化財調査報告書第7集 毛呂山町教育委員会
村田健二 1992 『桑原遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第121集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
山本 稔 1991 『山王裏・中原遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第98集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

謝 辞

最後になりますが、本稿を作成するにあたり下記の諸氏、諸機関に様々な御協力・御教示をいただいた。末筆ながら心より感謝申し上げる。(五十音順、敬称略)

飯塚 誠、池上 恒、池田善文、石井隆博、上野恵司、大江正行、岡田賢治、小林昭彦、駒宮史朗、坂篠秀一、坂本和俊、佐藤好司、佐藤春生、塩野 博、鈴木篤雄、関 義則、田中一郎、田中 信、塙田良道、津野 仁、利根川章彦、長流敬康、仲山英樹、乗安和二三、増田逸朗、松尾鉄城、松本昌久、右島和夫、村木 功、山崎 武、川越市教育委員会、川越市立博物館、荻市郷土博物館、東広島市教育委員会、美東町教育委員会、毛呂山町教育委員会、毛呂山町歴史民俗資料館、山口県埋蔵文化財センター

研究紀要 第10号

1993

平成5年12月20日 印刷

平成5年12月25日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 大里郡大里村大字箕輪884

☎0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社